

---

# 異世界で物書き

Ryui

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界で物書き

### 【Nコード】

N9638X

### 【作者名】

Ryuu i

### 【あらすじ】

気が付いたら異世界でした。中世ヨーロッパ風で、どうやら剣は現役、魔法みたいなモノもありました。「ファンタジー万歳！」と三十路手前の男は喜びました。ですが、心は少年の様にはしゃいでも、肝心の体力がついて行きません。現代社会で仕事に追われ続けたその男は、泣く泣く冒険活劇に見切りを付けます。「それならば！」と、現代社会では叶えられなかった職業を目指し方向転換、異世界での夢は叶いませんでしたが、現代での夢を叶える為に、叶え続ける為に頑張ります。力はありません。魔法みたいなモノもあ

んまり。けれど偶に、文化速度の差と、環境意識の差と、日本人的  
凝り方で、何かやらかすかもしれません。そんな一応、異世界日常  
系、それでは開幕の時間と相成りました。

## 1話 日常で到来（前書き）

初、小説です。稚拙ですが暇潰し程度になりましたら幸いです。

## 1話 日常で到来

「ふう……」

男が溜息を付く、先程から同じ事を繰り返している。  
太陽は真上に昇ったのだろう、もう窓からは陽は見えない。

「参ったな、本当に参った」

こぼした言葉に何の意味も無いけれど、出さずにはおれない。  
そんな感じであた、溜息を付く。

事の始まりは、彼の友人が言ったモノから動いた。

「ねえ先生、いい加減コレどうにかしてよ」

先生と言われた30過ぎの男は、そこで筆を止める。

男が目を上げた先には、16歳くらいの金髪碧眼の小柄な少年が、本の山を崩さぬようにこちらに近づいて来ていた。

「来ていたんですね、おはよう」

少年の髪と目の色は、この国では有り触れたモノであるがその造形が一線を画していた。

同性でも振り返り見てしまうであろう、均整の取れた理想的な配置に、乙女達が夢見る『王子様』の見本が現実に出てきたのかと錯覚する程である。

5

「おはよう、じゃないよ。もうとっくにソール様は真上に来てるって」

外の方を見ると、太陽はもう窓から見えなくなっていた。どうやら仕事に没頭し過ぎて時間の感覚が見えない様だ。

「もうそんな時間でしたか、なるほど、お腹が空く訳だ」

「また、徹夜したの先生!？」

「いえね、この切りの良い所まで書くうと思っていいたら夜が明けてたんですよ」

「いい加減にしないと、死んじゃうよ！」

そう言いながら、少年が手持ちのバスケットから食べ物を取り出すうとして手を止める。

「ああ！この前片付けたのもうテーブルが消えてる……」

「ちゃんとソコにありますよ？」

男が指さす場所にはいくつもの本の塔。  
辛うじてテーブルの木目が見え、これがテーブルだと解る。

「あーもー！これ全部撤去しちゃうから！」

「ああ！待ってください、まだ資料として使ってますからそのままそのまま」

「ダメ！ご飯食べれなくなるから！」

ぶつぶつ言いながら、男を無視して本を移動する。  
結局は別の山が成長しただけなのだが取り敢えず、である。

テーブルに置いたバスケットから、昼食用のサンドイッチを取り出し並べる。

男は机から腰を上げて背筋を伸ばすと、面白いくらいに音が鳴る。自覚はなくとも身体は正直で、お腹も鳴り始めた。

少年がおかしげに笑いながら「ちゃんと体調管理はしないと」などと言われても当人はどこ吹く風で気にしていない。

「何時もはちゃんと食べてますよ。偶に忘れるだけですって」

「怪しいなー、ほんとかなー」

「そんな事より、折角出してくれたんですから、食べましょう食べましょう」

これ以上追求しても昼食が遅くなってしまっているので、少年も会話を一旦止めて水筒を取り出し、二人分用意する。

「なんとかしないとイケないかな…」呟く少年は正面を向き、気持を切り替える。

「恵みによる糧を口に出来る事、感謝致しますソール様」

子供っぽい所が抜けきらない歳の少年だが、祈る姿は堂に入っている。

そんな少年を微笑ましく思いながら、男も短く「いただきます」と食前の挨拶をしてサンドイッチに手を伸ばす。

食前の祈りさえ終わってしまえばいいのか、少年が会話の続きを切り出す。

「ね、先生。いい加減何とかしようよ」

「何をです？」

食事時の会話はマナー違反であるが、ここには二人しかいないのでお喋りが続く。お互い黙って食事をするより楽しいからだ。

「この本の山、これじゃ家を任せた意味ないよ」

「ふむ、しかし、私の仕事柄、こうなってしまうのは、必然でありまして、それになかなか忙しく……」

しどろもどろになるも、男が住んでいるこの家は元々が少年の持ち家であり、現在は男が借りて住んでいる。

持ち主に突っ込まれると、とても弱い。

「まあ、先生には新作早く出して欲しいし。そこでね…」

なんだか、よくない流れを感じた男は生きる道を探すが、いたずらを思いついたかのような飛びつきりのイイ笑顔で少年が言葉を続ける。

「掃除する『人間』が必要だよね！」

「ふう…」

何度思い返しても逃げ場はなかったのだと諦める。そもそも男には選択肢はない。

この家の所有者は彼の少年であり、男が前の貸し家を追い出され途方に暮れていた時に「家の管理をするのなら」と条件付きで、しかも格安にて空家を紹介してくれたのだ。

人が住まなくなれば、家の耐久年数は加速度的に短くなる。

しかし、男が仕事に精を出せば本の山が生まれ部屋が埋もれていく。

実際、家の管理どころか自分の健康管理すら放棄して、仕事に没頭する始末である。

「住み込みつて所がな。一人の方が気楽なんだけど、なんとかして、せめて通いにして貰うか……」

一人で生活していた時間が長かった為か、同居人が出来ると言う事に抵抗感が働く。

つまりは、いい歳をして他人との近い付き合いが分からないのだ。

今は没頭すべき原稿に筆を置き、男はある人物を迎える為玄関のホールにいた。

その背中はまだ既に煤けて見える。

「もうそろそろ時間でしょつかね、確か到着の時間は」

そう呟いた時、玄関扉からノックの音が響いた。

「あ、はい、今開けますよ」

ノックに返事をしつつ、男が扉を開け放つ。

玄関先には女性が一人、ニコリともせず無表情で立っていた。

「本日からこちらでお世話になる、アイリと申します。以後よろしなに、フミアキ様」

アイスブルーの双対の宝玉に、一瞬見蕩れるが慌てて意識を戻す。見蕩れたアイスブルーが、余りにこちらを冷たく射抜いてたからだ。

「こんにちわ、初めまして、この家の一応主？のフミアキと申します。あ、主と言いましてもここ、借家ですからね、おまけに私、平民ですし堅くならず、気軽にしてください……」

あはははー…と乾いた笑いにも、やはりアイリは無表情だった。完全に滑ったと凹みつつ、まだ挨拶だけの自分に活を入れる。

「それでは中へ、遠路遙々お疲れでしょうお茶でもお出しします」

「結構です、お茶などメイドである私の仕事です。キッチンの場所だけ御教え願えますか」

ピシヤリと言い放つアイリに、フミアキは気圧される。

「いきなり仕事もないんじゃない？今日は着いたばかりですし、一日ゆっくりしても」

「我が主より、「まずは掃除！」と言伝されております」

「はあ、そうですか…」

三度肩を落として、諦める。彼女は少年の刺客なのだ、ならばもう好きにさせるしかない。

項垂れながら、「案内します」と言うフミアキに、アイリは無言でついて行く。

館の中を順に案内していると、段々アイリの表情が険しくなっていく。

初めて感情らしきモノを見たな、と呑気な事を考えるフミアキだったが、最後に自分の書斎を見せたらアイリに館から追い出された。

「よくわかりました、わかりましたので暫く外で待っていて下さい」

有無を言わせない迫力と、凍えるような双眸がフミアキを貫く。

どうやらアイリは、館の現状に大変ご立腹のようだ。

今の彼女はこれから戦場に向かうと言わんばかりの気迫を持って、

立っていた。

（なにこれ、こわい）

ここに上下関係が、決定された瞬間だった。

1話 日常で到来（後書き）

ご意見、ご指摘ありましたらお願いします。

12/16 改稿

## 2話 猫で犬（前書き）

この作品には厨二的な表現が多分に含まれています。  
アレルギーのある方は戻るボタンを押して戻ってください。

## 2話 猫で犬

魔窟掃討作戦（アイリ談）より、2週間が経った。

以前とは見違える程の書齋にて、以前と変わらず執筆中のフミアキ。

床に直積みの本達は、新たに作られた壁の本棚に綺麗に整頓されている。

「金持ちって怖いなあ」

そう呟くフミアキだったが、館からフミアキが追い出されてからアイリは家具職人を呼び出し、書齋の壁に本棚を作らせ本の山を処理した。

出来上が立った本棚は、上質な木材と丁寧に繊細な細工まで彫られており、職人の腕の良さを窺わせる一品と仕上がった。

一目見て一流の仕事と判断出来る本棚の出来に、フミアキは歓喜したが瞬時に自身の経済状況、即ち財布の中身を思い出す。

怖くなって小声でアイリに聞くと、「全て、我が主の計らいです」と言われた。

「この家も随分綺麗になったし」

館の掃除に掛り切りになる事5日、館の設備に屋根の修繕に7日、ちよっとしたりフォームが終わったのは先日である。

よくここまで手を付けずに過ごしましたね、とアイリからお叱り

を受る羽目になった。

「悪い人ではないのは分かるんですが、怖いんですよえ」

初日のインパクトに、館の管理不足からくる罪悪感。ましてや、あの少年の紹介なのだ、逆立ちしても頭が上がらないし、アイリの給金に関しても少年持ちである。

「あの子にお世話になりすぎて、返せる恩の宛がない」

「この所の急激な環境の変化と、少年への積もった大恩に筆が止まり思考が飛ぶ。

気が付けばアイリが隣に来て、お茶を注いでいた。

「あの、アイリさん、何時の間に、こちらに？」

「ノックをしても返事がなかったので、勝手に入らせて頂きました」

と、しれっと答える。

気配もなければ、優雅に注ぐ所作にも音がない。

ふわりと紅茶の香りが鼻をくすぐり、匂いだけでも上質な茶葉である事が窺える。

「ありがとうございます、この家にはお茶の葉はなかったと思いますが、どうしたんですか？」

「買って参りました」

「はあ、しかし、随分高そうですね」

「我が主より、お世話に当たり抜かりない様、仰せつかっております」

「お、大袈裟ですね」

紅茶を啜ると、会話が途絶える。

どうにも会話が続かない、他所のメイドさんとやらもこんな感じなのだろうかと思うも怖くて聞けないフミアキだった。

窓から流れる初夏の風に、紅茶の湯気が揺れる。

暫く無言で紅茶を堪能するフミアキに、珍しくアイリが話を切り出す。

「…フミアキ様は、我が主とはどういったご関係でしょうか」

「あれ、何も聞いていませんか？」

「主より、執筆に滞りなき様便宜を図ってほしいとの事でした。推測は立ちますが、貴方様の口よりお聞きしたい」

「そうですね…、読者であり、友人であり、そして 命の恩人と  
言った所でしょうか」

この言葉に、アイリはじっと目を細めるもどこか得心がいった顔をした。

少年と知り合う切欠となった出来事は、フミアキの名を良くも悪くも広める結果になったので彼に近い人物なら、今の説明で事足りるだろう。

「彼に仕える貴女からすれば、私なんぞには関わり合いを持って欲しくない、そう思うのはしょうがない事だとは思いますがよ」

すみません。と、どこか自虐的な笑みを浮かべる。

「確かに関わってほしくありませんが、個人としましては」

ボタン！と唐突に書斎の扉が開け放たれる。

二人の視線が扉の先に注がれる。

「すごい！あの部屋が綺麗になってるー！」

興奮気味に感想を口にする少年、あの本の山を見ている者からすれば、現在の書齋は別モノだろう。口を酸っぱくして注意してた少年からすれば一塩かもしれない。

「アイリ、よくやった！」

「はっ、恐悦至極に存じます」

「ふっふっふ、僕の見立てに間違いはなかった、やっぱりアイリを送り込んだのは正解だったね！」

「…送り込まれた方は、大変でしたよ」

「何言ってるの、先生がちやんとしないからだよ！」

ぼそりと呟いた言葉を聞き逃さず、直ぐ様ファミアキの文句を両断する。

怒った様と言う姿は、年齢よりも幼く見えて愛らしいと思う他な

い。

「もしイヤだったら、これからはきちんと整理整頓！」

「そうですね、これだけ綺麗にして貰ったので、汚すのに抵抗が出る様になりました」

うんうん、そうですね。と得意気に頷く少年を見るフミアキだったが、ここから逆襲が始まる。

最近押され気味なのだ、少しくらい仕返しを、いや、2週間お世話になったお返しをあげなくては。思いながら、声が僅かに弾む。

「ええ、そうですね、これからは掃除にもっと力を入れるとします。ただ、掃除に専念しすぎて新作が遅れるかもしれませんが、そこは容赦してくださいね」

その言葉を受けて、一瞬にして固まる少年。

先程まで絶頂にいただけにあつて今の奈落に落とすに十分であった。

言い返したいけれど言い返せない、少年に取っては死刑宣告に等しい。

無言のまま、その内、目尻に涙が溜まっていく。

このやり取り自体、二人に取っては何時もの事である。

少年がフミアキに説教をする、フミアキが反撃する、少年がやり込められると泣きが入る、フミアキが土下座する、が一連の流れになる。

今回は連敗が祟ったせい、伝家の宝刀まで抜いてしまったのだ彼の機嫌を治すには、どれだけの土下座がかかるか少し後悔が入るも、目まぐるしく表情の変わる少年を見ていると、またやってしまったのが困りものである。

そんな何時ものやり取りであるが、フミアキは重大な事を失念していた。

ここには二人だけではない事を、そして彼の少年を主と仰ぎ、忠誠心厚きメイドがいる事を。

少年いじりを堪能しつつ、そろそろ土下座と謝罪の体勢に入ろうとした矢先フミアキの足が止まる、止められる。足の踝まで『氷』が張っている。

「我が主の涙、貴方様の命より安いと思わない事です」

普段の澄んだアイスブルーの瞳が色濃く染まる、彼女の手は空中に踊り方陣を描き、空陣からは漏れる燐光は、籠めたる力の大きさを物語る。



「あ、この状況、このアイデア、次回のネタに使えるか？」

「ちょッ！？先生もうちょっとで本当に拙いんだよ！？危機感持ってよー！！」

「もう、最後の言葉も伝えましたし、いいかなあーとか…後、大分感覚なくなってきました」

「いいかなー、じゃなーーーーーい！！！」

「さてと、時間と相成りました」

胸まで氷が達し、フミアキの首がカクんと落ちる。  
それまで真っ赤になっていたクーエンフルダの表情が入れ替わる、人形のような感情の持たない人型がそこにいた。

「アイリーン、本気か？」

「どんな処罰も覚悟しております、ですが、この男の存在はひ…」

言い終わる前に口が止められる、部屋には無数の方陣が舞う事に寄って。

鉄火場に置いても途切れる事のないハズの鋼鉄の意思が、部屋を覆い尽くす力に当てられ途切れそうになる。

無言のまま、クーエンフルダは描いた方陣に力を更に注ぐとフミアキにまとわりつく氷が砕けていく。

しかし、フミアキの意識はまだ戻らない。

息を深く吸う、クーエンフルダのエバーグリーンの瞳がブラッドレットに染まる。

「「黄神「、最神「、天命神「、逆風「吹きて誰彼の「、夕星「、入星「、宵闇星「、  
迷い彷徨い宵の口「、帰れぬ黄泉道「に不憫ぞ一縷「、古鐘「、神鐘「、魂鈞「、  
鐘「、御神のみてぐら落下傘「、空瑠璃「空瑠璃鳴り響け「」

クーエンフルダの口から、『形ある紋言』が紡がれる。

「『ゴートベールドの福音』」

部屋に散らばる方陣から、光の奔流が解き放たれる。

同時に部屋いっぱい音に音が満ちる。低く、高く、激しく、静かに、  
全ての『光』と『音』がフミアキに降り注ぐ。

しかし、まだ目を覚まさない。顔色は元に戻っているが、意識がないようだ。

クーエンフルダは、更に力を籠める。絶対に助けるのだと言い

たげに。

見守っていたアイリがここで溜息混じりに動く。

「失礼」

短く言い切ると、フミアキの上体を起こし、『当て身』を食らわせる。

「アイリーン、まだ…ッ」

何かするつもりか。と、問う前に、フミアキが小さな呻きを上げた。

そこでようやく方陣の稼働が止まる。

長い息を吐き、安堵の思いが胸を満たす。

安堵と一緒に「何故？」と言う疑問が湧き上る。あの方陣は、クーンエンフルダが持つ最高の治癒陣であり、その効果は自身が使い数多くの人間を救ってきた事で、証明されている。

「アイリーン、何故私の治癒陣が効かなかった」

答え難そうにするも、主人の目が答えを促す様にこちらを見据える。

「はっ、偏に… 過剰でうざいます」

「は？」

若干間の抜けた声が出る。それでも、アイリは説明を続ける。

曰く、最上級の治癒陣が必要な状態ではなかった。

曰く、氷は表面に張っただけで単に気絶、殴れば起きる。

曰く、過剰な治癒陣で逆にフミアキの命が危なかった、等々、アイリの話が続くにつれて、どんどんクーエンフルダの顔が赤くなっていく。

「きゃーーーーーー！！それ以上言わないでええええー  
ーーーーー！！！」

「前から思っておりましたが、少々方陣に頼り気味かと存じます」

要は、焦ったクーエンフルダが混乱して状況を把握、確認せずに感情のまま力を奮って、墓穴を掘った。

そんな公式がクーエンフルダの頭に浮かんだ。  
恥である。

「うう…つつつ、なんだこれ、気持ち、悪い…うえ」

やっとのようで意識が覚醒するも、頻りに頭を振っているフミアキ。

意識が飛んでいた為、部屋を見渡す。

頭を抱えて座り込むクーエンフルダと、何時も通り背筋を伸ばして立っているアイリ。

「あの、えーっと…、何が起こったんですか？」

「あー！先生無事だったんだねー！」

よかった！と言いつつクーエンフルダがフミアキに駆け寄ってきた。

そして、アイリと一緒に氷からの経緯を、軽く話して謝罪する二人。心底申し訳なさそうに謝る少年と、何時もの無表情で謝罪を口にするメイドさんその対比に少し笑ってしまうフミアキだった。

「アイリ！もうちょっと真面目に謝ってよー！」

「いや、いいんですよ、クー」

「よかないよ、本当に危なかったんだよ！…主に、僕のセイなんだけど…っ」

「私を助けようとしての行動だったんですから、そんなに気に病まないでください」

少年をやんわり慰めるフミアキの顔には、殺されかけたハズなのに負の感情が欠片も感じられない。

作り笑いでも、感情を押し殺す様にも伺えずそんなフミアキを見るアイリは、その目をじつと細める。

アイリの視線に気づいてか、フミアキがアイリの弁護をする。

「あの出来事から、今でも教導院に睨まれていますからね。いくら貴族の君とは言え立場を悪くする、アイリさんの心配は最もですよ」

「またそうやって他人の心配するッ、先生は、もっと自分を労わるべきだよ！」

「そうですね、次からはもっと気を付けるとします」

はぐらかす様に答えるフミアキに、反駁し口を開も直ぐ様閉じられる。

何故なら、フミアキの顔色は青を通り越して白くなっていたからだ。

健全な人間に最大の最高の治癒陣でもって、クーエンフルダの常人より遥かに強い力が遠慮なく注がれた為、福音の力がフミアキ

の身体の中行き場をなくし暴れてるのだ。

「先生！本当に大丈夫なの?!」

「不味いですね、急いで処置を ……」

二人の遣り取りを聴きながら、フミアキは前のめりで倒れる。  
今度は、自らの意思で意識を手放す。実を言つとフミアキは限界  
でいっぱいだったのだ。

## 2話 猫で犬（後書き）

1週間に1話を目処に頑張ってみます。  
ご意見感想お待ちしておまります。

12 / 16 改稿

### 3話 昼で夜

一日の内に二度死にかけた事件から三日目、フミアキはまだベツトの住人でいた。

クーエンフルダの力が強かったのか、それともフミアキの体力が貧弱だったのか、一日目は起き上がる事すら出来なかったのだ。

「あれはアイリさんに、上手く嵌められたかな、いや、試された…そんな感じか」

ある人物の真意を忖度するに、怒らせるか死に際まで追い込む、本音を零さずには居られない状況を作る。

主人にとってフミアキと言う人間は、信用するに足る人物か否か。フミアキにとって、前回の遣り取りは試され様な印象を受けた。

「にしては…、些か乱暴だった様な、時間を掛けるゆとりがなかった？ 性急に確かめたかった？ 案外、大雑把な性格だった？ クー以外はどうでも？ あ、これが一番しつくりき……」

「随分な仰り様ですね」

「ハイッー」

何時もの如く、いつの間にかアイリが紅茶を煎れている。もちろん無音で。フミアキの心臓は、事、アイリに関して最弱である、トラウマに昇華されたのかもしれない。

「サイレント・ティーは止めてくださいよ……」

「変な固有名詞を付けしないで下さい、それとノックは致しました」

今日も無表情が固定のアイリに、腰が引ける、ベットの上だが。ありがたく、と紅茶を貰うフミアキにアイリが続ける。

「楽しそうな話でしたの、声を掛けそびれました」

「まずい、と言う顔をしフミアキは露骨な話題転換を図る。

「そう言えば、茶樹の中には態と葉に付く害虫を駆除せず、放置する育成方法があるらしいんですよ」

「……」

「……これはですね、害虫に葉を噛まれた茶樹が再生の為に変色するんですよ」

「……………」

「……………実はこれ、変色ではなくて発酵してるんですよ、茶樹が本来持つ香りは、害虫と茶樹が持つ再生能力で、特有の匂いに変化、する、それを収穫、製茶する、そうですよ」

「……………」

「……………ははは、でも、茶樹自身は、治そうとしたら、今度は、摘まれて踏んだり、蹴ったり、じゃないですか？」

「……………」

「……………もう無理だ…。と、悟ったのか、はたまた諦めたのか、三日前の出来事が鮮明に脳裏を過ぎる。」

「……………もう、遺書くらい作って置いた方がいいのかもしれない。」

「……………」

「……………ボタン！と扉の開けられた音にてアイリの言葉が遮られる。フミアキさん！倒れたってどう言う事ですかぁ……………!!」

「原稿の締切がもうすぐ…、って、フミアキさんが居ない!？」  
「そんな、椅子から生えてる新種の自生植物だったんじゃない?！」  
「あ!足でも生えて移動出来る様になったとか、新種恐るべし」  
「そんな事より、原稿……!?!どうしよどうしよどうしよ」と、  
書斎の方から聞こえてきた。

「……」

「……」

「…アイリさん、連れてきて貰っていいですか」

分かりましたと、小さく綺麗なお辞儀をして書斎に向かうアイリに、フミアキは小さく安堵した。

「もー、そう言う事は早く言ってくださいよー」

そつぷりぷりしながら話すと、女性はハニーブロンドの肩口で切り揃えた髪を揺らしながら、フミアキに抗議してきた。

「ラミアさん、そんな事言いましてね、こちらも立て込んでたからしょうがないでしょう」

「だーかーらー、なんで少し間空けたら、家は綺麗になってるわ、メイドはいるわ、原稿は出来てないわ、一番なのは椅子から移動してる事、驚かせすぎですよー！」

「貴女もう19でしょう、もうちょっと落ち着いたらどうなんですか。それと、一番驚いたのがソレってドウなんですかね」

「十分落ち着いてますー、弟から「姉さんは発育だけはいいいよな」って言われるんですからー」

「ソレ、嫌味じゃ…」

「えっ？大人って事でしょー？」

アイリやフミアキよりも、高い位置にある頭を少し傾げてラミアが答えた。

女性にしては珍しい高身長を持つ彼女の、一番のコンプレックスの話に発展する前にフミアキが話題を変える。

その身長から繰り出される攻撃に、今は耐えられないと踏んだからである。

「取り敢えず、こんな状態なので原稿はもうちょっと待って下さい」

「後4日は待ちますから、大丈夫ですよー」

「4日って…、全然締切延びてないじゃないですか」

「だって、ここの所反響は良くなって売上げ伸びたんです。所長から「そろそろ気が緩むからな、絶対アイツの原稿を持ってこい」って指ポキポキ鳴らしながら言われたらー…」

居るはずのない所長の姿が見えるのか、首をぶんぶん振って青醒めるラムリアに少し同情するも、命がかかるのはフミアキも同じである。

「私の命も、もって4日ですか。なかなか悪くない人生でしたね」

ベットから遠くを見つめながら、刻一刻と薄くなるフミアキを必死に押し留める。

原稿が書けなければ制裁を受けるのはフミアキだが、もちろん原稿を持ってこれなければ、ラムリアも説教を受けるのは確実である、わりかしマジに気絶するらしい。

「フミアキさん?! 逝かないでー!! 原稿、せめて原稿書いてから逝ってー…!!」

ちよ、首が首が絞まつ。焦ったラミアに襲われ、無自覚なままに絞め落とされた。

きっかり10分後に目覚めたフミアキが、「実はほぼ原稿は出来てるんですよ」と明かす「どーして意地悪するんですかー!!」大きな声量でもって、拳が飛んできて意識も一緒に飛んでしまった。

「やれやれ、酷い目にあつた」

少し開け放つた窓から夜の風が吹いてくる、初夏も過ぎたがまだ夏の暑さを感じない。

昼の出来事にボヤきつつ、手元には原稿を置いて推敲する。

「これで三冊目、本当にここまで出せるとはなあ……」

感慨深げに息が漏れる。何時もの困った様な溜息ではなくしみじみと噛み締めた口から。

「こちらに来てからもう三年か、思えば遠くに来たもんだ…」

部屋は暗く、手元を照らすだけの小さなランプの火が、ジジッと燃える。

「私はね、今の生活にとっても満足してるんですよ。ですから、そんな怖い顔しないでください」

口調を変え、部屋の隅のくらがかりに向けて言い放つ。  
フミアキにしては、割と真面目な声を出す。

「…」

すうーっとアイリの姿が薄暗闇に浮かび上がる。

「びっくりしました？いや、何時も驚かされてばかりですからね。でも、表情変わりませんね。疲れませんか？」

冗談めかして喋るフミアキに向かって、アイリの威圧が増す。

「おう、そんなに睨まないでくださいよ。ちょっと場を和ましたか

「ただけなんですけどね」

自分で空気を作って、自ら壊しては世話のない話だが…、もう一度、真面目な顔を作りアイリに向かい合う。

「何を言ったら貴女は納得してくれるんでしょうね。先程も言いましたが、私は現状に何ら不満はありません。ですから、これ以上望むモノは無いんですよ」

「貴方様が宜しくても、『教導院』はそう思わないでしょう。違いますか」

『教導院』それはこの国に住んでるなら無縁では居れない。  
太陽神ソールを唯一神と崇め、国のみならず世界宗教と言っている規模を持つ。

「『教導院』ですか、あの時は本気で死を覚悟しましたね」

まるで良き過去を懐かしむ様に話すフミアキに、アイリの眉が僅かに動く。

「私が『氷』を撃った時も、貴方様は死を覚悟する様な言葉を口にしました。アレは分かっただけで巫山戯たのですか」

「死ぬかもしれないと思ったのは正真です。真面目な遺言ですよ」

「貴方様は異常です」

ケロツと答えるフミアキに、短く言い切る。

あの時、手加減して殺さぬようにアイリが放った形としての死に  
対して、淡々と遺言を述べるフミアキのその姿は、理解出来ぬモノ  
であった。

ましてや、どれもこれも死を前にして言うには客観過ぎる。

「いやはや、手厳しいですね」

「我が主に、少しでも悪害になると判断した時、今の様に覚悟を決  
めておかれるといいでしょう」

御心が鈍らぬ様に。と、言いつつ退室していった。

「誰も彼も、死を忌避し過ぎている。そんなに怖いモノじゃないの  
にな。もっと怖いモノなんていくらでも…」

零すフミアキの言葉は、今度こそ誰にも受け取られる事なく薄暗

がりに消えていった。

### 3話 昼で夜（後書き）

お気に入りが、3件も入ってテン ション 上がって 来ました。  
有難う御座います。有難う御座います。

12 / 17 改稿

#### 4話 本でアイス(前書き)

クー、暴走のまっき。

#### 4話 本でアイス

カリカリと筆を走らせる音が、書斎にあるだけの時間。

外では太陽が暑さを主張している。どうやら盛りの本番がやってきたようだ。

フミアキは気付かない程集中して、執筆作業に没頭している。

「うーん、やっぱりもうちょっと質のいい紙使いたいな」

独りぼやくも、普段フミアキが使っている紙は、等質の一番下の紙であるから仕方がない。

混ざり物の少ない上質な紙はお高いのだ。

「中世ヨーロッパ風って思っても、中世風ってだけで文化レベルがまちまちで、現代に匹敵する技術もあれば、さっぱり発展する気配のない技術もあるし。やっぱり不思議技術の方陣があるからなのか」

「印刷技術が方陣で賄われてるのは、本当に驚いたしそりゃ科学が発展しないわ」

「科学が根底に発展した世界と、方陣が根底に発展した世界。明らかに後者の方が取れる手段が多い分、世界としてポテンシャルは高い訳だが、如何せん、両雄並び立たないのかね。かたっばしか成長していない」

「それともあつちの世界でも、もしかしたら魔法みたいな不思議パワーが過去存在したのかも？けれど淘汰されて科学が残った？『世界』は常に一を望む？唯一神信仰もその表れ？」

「船頭多くして船山登っても、山に登れる技術力を持つ船頭が居れば、いくら船頭が居てもいい気がするけど。いつそ、海を進む技術力を持つ船頭と、山に登れる技術力を持つ船頭が、タッグを組んで弟子教育に励めば、宇宙に登れる船頭が出来上がるかもしれないな。む、両雄並び立たないか…結局元に戻った。和を似て貴しと為し、忤ふる事を無きを宗と為せ。実に含蓄深い言葉だな」

妄想炸裂して苦笑している様は、本当に余人を遠ざける。

この時ばかりは、アイリも危険を察してか近寄らなかつたとか。

だがしかし、ここに空気も、妄想も、書斎の扉さえもブツチ切り、クーエンフルダが力の限り飛び込んできた。

「先生エエエエエエエエ！！ 新刊買ったよオオオオオオオオオオオオツ！！！」

頬は紅潮しており、背中まで垂らした癖つけのある金髪は飛び跳ね、エバーグリーンの瞳は感情の高ぶりを抑えきれずに潤んでいる。

「『不機嫌な勇者』第3巻読んだよッ！すごいね！面白いね！楽しかったよッ！」

高く掲げた手には、フミアキの著書『不機嫌な勇者』第3巻（最新刊）が高々と掲げられ、

「王都を出発してから、最初の街でいきなり領主を吊るし上げなんて！その理由だって、街中で偶然出会った孤児院の女の子が、お腹を空かした勇者に自分のパンを上げちゃってさ！女の子も空腹だったのに

勇者のあまりの飢餓っぷりにほっとけなくなったとか、優しい女の子だし！でも、その女の子の住む孤児院が、悪徳領主に狙われてて危ない！」

余りに嬉しいのか本の内容を興奮しながら語りはじめ、

「そこは勇者だよね！悪徳領主の乱暴な部下をコテンパにした後に！「嬢ちゃん、パンあんがとよ。おかげで力が湧いてくるぜ。まあ、あいつらの事はこの兄ちゃんに任せときな」って颯爽と去る勇者！もう次の行動は決まってるよね！1巻の時に王様に楯突いたくらい捻くれてるのに、女の子の純粋な気持ちに弱いなんてさ！ずるいよー！」

フミアキは、突然の事態に呆然とし、

「そのまま悪徳領主を懲らしめるかと思っただらさ、なんでか歓談し始めるし！もー！悪徳領主に対して、なんでそんなに下手に出るのって思っただよ！普段は肩書きとか嫌うくせに、悪徳領主には勇者だつて名乗って取り入ろうとして、悪巧みに乗っかり始めた時は不安になっちゃったけどさ！まさかそれが勇者の作戦だったなんてー！そんなの普通思わないじゃない！」

尚もまくしたてるクーエ、

「勇者の策略に嵌った時は、拍手大喝采！泣きながら悪徳領主が「た、頼む！金ならいくらでも払う、だからっ！」って往生際、本当に悪いよねー！それに「わりーな、お前の払う金よりも、もっと価値のあるモノ貰っちゃったからよ」って！全然悪いなんて思っただらさ！にね！その後が！「そ、それは一体！？」って絶る悪徳領主にキツパリ言い放つんだよね！「堅いパンのひと切れさ」って！「かっこいいー！ー！！！」

何時まで続くんだ」

「悪徳領主を吊るし上げたら、次が怒涛の展開を予想させる流れになるし！等々、魔王軍の四天王の二人目が勇者の目の前に現れて、あれって……」

延々と続きそうなクーエンフルダの感想文に、フミアキが机の上の手頃な本を取る。

幸い、こう言う状態の対処法は前回経験済みなので、その手順を思い出し掴んだ本を、投擲する！

「きゃんツ！」

可愛らしい悲鳴と共に崩れ落ちるクーエンフルダ。

フミアキが放った本はアーチを描ききる前に、クーエンフルダの額に当たった。

何食わぬ顔で近づき介抱すると「うう…いたたた…」と意識を覚ます。

おデコが赤いのはチャームポイントとして数えられるだろう。

「大丈夫ですか？床にあった本にけつまづいて頭を打つなんて、そっかしいですね」

「あ、え？。うー、あいたた、あれ…、そうなんだ…？」

きつぱりスツパリ言い切るフミアキに、若干混乱気味に呟くもまだ意識がハッキリしない、そんな彼を押し切る事にしたようだ。

「頭を打ったんですから、少し座って紅茶でも…。ん、紅茶?!」

拙い!と、冷や汗が流れるも気持ちを切り替える。だが、顔を上げるとそこには…。

「我が主に危害を加えるとは、よろしいですね」

なにがどうなってよろしくされるのか分からないが、フミアキは腹を括る他なかった。

「生きてるって素晴らしい」

「今回は時間がかかって、もうダメかと思ったよ…」

なんとか一命を取り留めて復活したフミアキに、心配そうに寄り

添う。

「アイリさんの力加減は絶妙ですね。こう、一歩手前どころか半歩手前まで持ってかれますからね」

「褒めちゃダメでしょ、まったく先生は……。何かの拍子に、コロっと逝っちゃいそうで本当に怖いんだからね」

げに恐ろしきはアイリの匙加減である。

「まあ、遺書は用意してあるので、問題はないんですけどね」

「この前言ったのは本気だったの！？いや、問題あり過ぎでしょー!!」

「因みに、遺書には結構恥ずかしい事書いてあったりしますから、覗き見ちゃ駄目ですよ?」

「そんな事告白されても見ないから!そもそも先生は自分を労わらないのがいけないよ!ほっとけば本に埋もれてるし、食事を忘れて仕事するしあっさり命手放そうとするから!」

普段から貯めていた文句がフミアキに襲い掛かる。  
心配しての事だけに、この手の話をクーエンフルダに出される  
と弱ってしまう。

それでも、隠す様にこの遣り取りを誤魔化す。

「聞いてる！？そもそも普段の生活からしつかりしないといい仕事  
も出来ないんだからね！この前アイリの報告を聞いて吃驚したよ！  
確かに早く次回作を出して欲しいって思うけど、身体を壊しちゃ意  
味ないんだからね！ちよつと先生、解ってるの？！」

「聞いてますよ。でもこうも暑いと集中力が続きませんね。腰を据  
えて話を聞きますから、こちらで休憩にしましょう。アイリさんの  
『氷』で、面白い事を思い出して試したモノがあるんですよ」

「むー…、話の続きは必ず聞いて貰うよ」

それで面白いつて？基本的に素直な少年は、フミアキの提案  
に不満げながら首を縦に振る。

「ああ、それは地下室に行つてのお楽しみです。アイリさん、そこ  
の地下室の鍵を取って貰つていいですか」

壁に掛かった鍵の一群を指して、椅子から立ち上がる。

そこでふと違和感を感じる。アイリが鍵掛けを見て動かないのだ。

「

…」

「あの、アイリさん？」

初日に各部屋の鍵の説明はしたはずなんだが。と傾げる。  
表情にこそ出てはいないが困惑している様子に、彼女の主人が口  
を挟む。

「先生、鍵の位置ずらしちゃったんじゃないの？」

「定位置は変えてないですよ、番号を振ってないから混ぜると、私  
でも偶にごっちゃになりますからね」

「ほ、ほら！まだアイリはこの日が浅いから、こつこつ所で先生  
が気を利かしてあげないと！」

何処か腑に落ちない面持ちを残しながら、フミアキが地下室の鍵  
を手に取り、二人を案内する為に先導する。

「こっつて、先生があんまり入らないで。って言った所だったかな」

「ええ、中には危ない物もありますからね」

「危ないって、一体何が入ってるの？」

「いろいろですよ、気分転換にとか手慰みで作った物をと」

そう言っつて鍵を差し込み扉を開ける。地下室特有の湿った風を受  
けながら扉が重々しく開かれた。

「うわッ…。これは」

「……………」

先程の事があつてなのか、アイリは目で刺し殺してくるだけ。  
少年は口を開けたまま動きが止まった。つまりは、惨状、ただそ  
の言葉だけが相応しい部屋だった。

「確かこっちの方に……………」

あれどこだったのかな。などとぼやきつつ部屋を漁る。  
物がなければ、人が30人は入れそうな大きな部屋であろう場所。  
だがしかし、所狭しと置かれた謎の物体に占拠されてしまっている。  
ここを見た後だったら、書斎の本の山が可愛く見える。そう思わ  
せる程である。

「……ねえ、先生。聞いていい？」

本来ならアイリが詰問したいくらいだが、未だに沈黙を保っている  
のでクーエンフルダが代わりに問いかける。

「おっかしいな、どうしました、クー？」

「コレナニ？」

「ですから、私の作品達ですね。気晴らしに創作したり、分解した  
り。あ、そうでしたそうでした。昨日完成したから、冷凍室に入れ  
てたんです」

いやー、歳はとりたくはないものですね。からからと笑うフ  
ミアキに、クーエンフルダは大きく息を吸い、大咆哮の構えに入  
った。

「　　ッ！？けっふけっふっけ…ヶほッ！」

「クーエンフォルダ様！？」

いきなりむせた主をアイリが心配する。先ほどまでフミアキが探し物をしていた為、部屋には埃が舞っていた。その中で深呼吸すれば、自然な帰結だろう。

「何やってるんですか、こんな所で深呼吸して。目的の物は上にありますから、さっさと出ましよう。とっくと出ましよう」

危険を察知して、むせる彼を押し出して部屋を出る。

ここは、男フミアキ最後の砦。一ヶ所くらい雑多な部屋があったもいじゃないかと、思いながら地下室を後にする。

「けほッ、酷い目にあつたよ…はぁ」

アイリから水を貰い溜息を付く。そんな少年を尻目に、フミアキは一抱えもある樽を持ち出してきた。樽からは冷気が漏れてる事から、冷たいナニかが入っていると推測出来る。

「先生、一体ソレ何なの？シャルルとか？」

クーエンフルダの言うシャルルとは、この国の夏場に愛食される果物の氷菓の事である。

手軽に涼を楽しめる為、この国の住人なら誰しもが口にした事がある定番品でもある。

「ふっふっふ、そんな単純な物ではありません！私が試作を重ね苦勞を積み、そして完成に漕ぎ着けた、血と涙と汗の結晶です！」

何時になくテンションの上がったフミアキの返答から、恐らく食べ物関係だろうと思わせるが、彼は「あの部屋で作られたの…？」  
「仰り様は大層ですが、血と涙と汗…口にして大丈夫でしょうか」と、アイリ。

二人して引いていた。

「まあまあ、怪しい物は入ってないんですがね…。ほら、こう言う食べ物ですよ」

厨房のテーブルの上に取り出された小皿に、樽の中の筒から取り出した白い塊を盛る。

未だに警戒の色を隠さない二人に説明をする。外に出したからには早めに食べないと勿体ない。

「これはですね、牛乳と生クリームと卵と砂糖を混ぜて冷やした食べ物…その名を『アイスクリーム』です！」

「うわー、薬膳料理だったんだね。でも、牛乳…」

「クーエンフルダ様、牛乳は身体に良い薬効があると聞き及びます。やはり偶の少量くらいは、御飲なさった方がよろしいかと」

「何故に薬膳。いいですか、これは冷たくてあまーい至高の嗜好品と言っていていいでしょうー！」

「うーん、先にアイリ食べていいよ？」

「エエイ！つべこべ、言う、なし、食べ！味わい！虜なる！」

いい加減溶けそうになってるアイスクリームを掬って、クーエンフルダの口の中に押し込む。何故かカタコトで。

「むぐッ！ふつく……………む、ぐむぐ……………！？」

「ご無事ですか！？クーエンフルダ様っ、おのれやはり貴様は危険だ、ここで処分す」

「……………美味しい！！」

「クーエンフルダ様？」

「ふっふっふ、そうですねうそうですねうアイリさんも食べてみてください」

「アイリ、これすっごい美味しいよ！こんなに美味しい物食べた事ない！うわー！あまーい！冷たーい！あまーい！あまーい！」

「……………そう言われるのでしたら」

目をきらきらさせて感動している彼に、警戒心を鎮めてスプーンを取り掬う。

クーエンフルダはパクパク食べてる。

必死に食べてる姿は小動物の如きで、頬を緩ませる。が、その隣

で得意げな顔をしてるフミアキが、鬱陶しい事この上ない。

「これは…、不思議な食感ですね。口溶けが滑らかでシャルルの様な水っぽさがない分、より甘さを堪能出来き味わい深い…。生菓がこれ程とは、確かにこれは美味です」

「思わないよね！苦くて臭くて美味しくない牛乳が、こんなに美味しくなるなんてさ！」

「氷を分けて欲しいと言われた時は、如何なる意図か計りかねましたが、感心致しました」

「アイスクリームもそうでしたが、本のアイデアも頂きましたし、こちらが感謝しなければいけませんね」

「あいであ？本の事とは一体」

「あー、アレやっぱりアイリだったんだね。羨ましかったな」

アイスクリームをパクつきながら喋る。

横でピシリと固まる音が、露骨に拙いと顔を顰めるフミアキを、じろりと観察して少年に向き直る。

「クーエンフェルダ様、どう言った事でしょうか。お聞かせ願いたいです」

「アイリ、先生の本読んでない？魔王軍『四天王』の二人目が出てきたんだけどそれがアイリにそっくりなの！灰青色の髪に氷の瞳、本だとすごい……、刺激的な衣装をつけて書いてあったよ。…男の人 悩殺とか」

首をぶんぶん振って厨房の隅に逃げるも、アイリの歩みは緩慢だった。

俊敏に動かれるより、鈍い動作で近づかれる方がよっぽど怖いのだけれども。

「落ち着いて。確かに、無断でキャラのモチーフにしたのは謝りますが、そう、このアイスクリームに免じてどうか、許して貰えませんか」

問いかけるフミアキに、アイリの肩で切り揃えられたグラスシュブルーを揺らしアイスブルーの瞳が色濃く染まる。  
つまり、許す気はさらさらないと体言している。

「命を安売りするのは如何なモノかと思いますが、本願でしたら致し方ありません」

「別に死にたい訳では…、痛いのは嫌いですよ？スタイルがいいのは褒め言葉と思うんですが」

「では、眠る様に逝きなさい」

アイリの踊る指が方陣を描き、空陣から淡い光が漏れる。

フミアキは視線をクーエンフルダに移すも、少年はアイスクリームを食べるのに忙しい様だ。

どうしてこうなった。そう思いながら目を閉じるのであった。

#### 4話 本でアイス（後書き）

読んで頂き有難う御座います。

まだ初心者で、客観的に自分の文を読めなかつたりします。

漢字のルビがあつたら。や、場面の説明文が足りない。

や、文法の間違い等

気になる場所がありましたら、ご意見、ご指摘助かります。  
よかつたらお願いします。

12/17 改稿

## 5話 旅で留守

「あー…、はあ」

その日は、珍しくクーエンフルダがアンニユイな様子になっていた。

いつも間隔を空けて遊びに来る彼は、感情表現が豊かで小動物的に愛くるしいのだが、今日に限っては哀愁を体現するかの様な姿が、その容姿端麗さから見る者を危うげにする耽美さがあった。

「全く、さつきから何ですか。溜息を付くのは私の専売ですよ、君は元気いっぱい売りじゃないですか」

「売りってなんなのさ！？もー、溜息が売れるなら品切れになるまで買って欲しいよ」

「君の溜息が切れたら、今度は私の溜息を横流ししますね」

「先生のがきた?!そんなの押し付けないでよ!!」

「出資者の貴方と受領する私、二人は常に一心団体だったんです」

「何時の間に！？」ついたら僕の比重高いのはおかしいよね！」

「はははは、一心同体と言ったでしょう。ですから、クーの溜息を私に押し付けて下さい。何、溜息は私の専売ですから楽勝ですよ？」

「あう…、先生が恥ずかしい事言ってる」

「女性に言うなら口説き文句ですが、君相手に何言ってるんですか。思春期特有の悩みなら同性の方が打ち明け易いでしょう。相談に乗りますよ」

「そんな深刻な悩みでもないし、思春期って…」

実は。と、何故か顔を赤らめて説明を始めた。  
「どうやらそっちの話題よりも、溜息の理由を喋った方が楽だった様である。」

「へえ、君の誕生会ですか」

「そうなんだ、毎年開いてくれるお父様には申し訳ないんだけど、いろいろあって苦手って言うか気が重いなだね」

「まあ、分かる気もしますよ。年が経つに連れて、そう言った催し物は気恥しいですからね」

「お父様が盛大にしちゃうもんだから、余計に恥ずかしいよ」

「何、家族に愛されてる証拠じゃないですか。いい親御さんを持ちましたね」

「…先生、にやにやしながら言っただって説得力ないよ!!」

二人の遣り取りは平常運転に戻った様である。

もちろん、この後参上したアイリにお置きされたのは言うまでもない。

寢室にて荷造りをするフミアキ、その服装は旅装を思わせる。いつもの持ち物を点検し、滅多に履かないブーツの踵を少し蹴る。

「どちらにお出掛けでしょうか」

「オオウ！？何度体験しても慣れない慣れにくい」

「慣れて下さい」

「自分が譲歩するつもりが微塵もない…とは…まあいいです。私は暫く旅に出ます、家の事はよろしく願います。後、フミアさんが来たら追いついてあげて下さい」

最後のセリフはいい笑顔で決めて、何故か窓から出て行くフミアキ。

何時もと変わらず表情を変えないアイリは、ただ窓に向かって小さくお辞儀するのだった。

「ええー！先生居ないの?!」

何時もの様に遊びに来たクーエンフルダが驚きを露にする。

それもそつだ、彼が引つ張り出さなければ食料の買出しすらもせず仕事をする。

訪ねてきて留守だった記憶が、彼にはなかった。

「連絡は出したのですが、何処かで行き違ったようですね。申し訳ありません」

「ううん、アイリが悪い訳じゃないし。でも珍しいね、何処に行つたか知ってる?」

「行き先は仰らなかったので、コリーを出しています。もう少ししたら連絡が来るかと思われまます」

「アイリにも言つてかなかつたんだ。むう、なんだろ、すつごい気になる!あ、旅行記なんか出す為の取材かな…でも、そんな事言つてなかつたしな」

一人唸つて考え出す。フミアキに対する情報のカードが少ない事

に、改めて思い知らされる。

「そっか…、僕、先生の事何にも知らないんだ」

クーエンフルダがフミアキを知ったのは、『不良勇者1巻』からであった。

偶々メイドの一人が置き忘れていった本を手に取り、何気なく捲つてから大きな驚きと感動を覚えた。物語の書き方、登場人物の斬新さにも目を見張ったものである。

それまで本と言うモノは、王国史か、帝王学だったり、ソール信仰書など所謂、お堅い本であり、それより易しい本となると、童子向けの御伽噺まで来てしまう。

大衆向けの娯楽書物は、ゴシップ等低俗なモノで占領されていた。(年齢制限がかかる物が大半を占めているのだが、クーエンフルダは存在すら知らない)

ましてや、フミアキが題材としたのは、『教導院』が検閲に最も力を入れる『勇者』を扱った読み物であった。

『勇者』と言う名は、『教導院』の看板にも等しく、イメージを崩す様な本は直ぐ様焚書された。

「……………つぶ、くくくッ」

「如何なさいましたか」

「うん、先生を知った時の事を思い出してただけど、『教導院』に真つ向から喧嘩売る様な本を出した人は、どんな人だろうって思ってたな」

「あの本の様な勇者像を『教導院』が認めるハズも御座いません。自殺志願者でなければ、頭の緩い人間だろうと噂はありました」

「勇者ボルドーはカツコイイと思うのにな。人間味に溢れててさ、ふてぶてしくて、信念を絶対曲げない！俺の剣戟がぶれないのは、ぶつ太い信念が通ってるからよ！」ってね！痺れるー！もー、そつだよ！全然『教導院』の言う『勇者』像を壊すモノでもなんでもないのでないのにな」

「人間味、と言うのが問題ではないでしょうか。『教導院』は『勇者』を、神聖性を持って祭り上げておりましたから。畢竟する所、<sup>ひっききょう</sup>畢竟する所、拘束されたのも当然でしょう」

「今思い出しても腹立たしいね。頭堅すぎだよ、先生の書く新たな『勇者』像だったら、あんな凝り固まった『教導院』の布教する、『勇者伝説』よりも信者増えるよ！それなのに、『教導院』ったら先生を処刑するとか言い出してたし」

「あの時は、助け出すのがもう少し遅ければ執行されていたでしょう。……残念です」

「アイリーン？」

「も、……申し訳ありません」

「全く、アイリは先生に厳しいんだから！でも、初めて牢獄に入った時、先生遺書みたいなの認<sup>したた</sup>めてたよね」

「辞世の句などと仰っていました。何処の国の文字か分かりませんでした」

「諦めが良過ぎるのも、その頃から変わってないよね。その点だけは、改めて欲しいのにちつとも聞いてくれないし」

「アレは病気の類です。心配するだけ、周りを巻き込み傷付けましよう。私としましては、深入りして頂きたく無く……」

「そう……だね。でも僕は……いや、私はアレが放って置けない。折れない信念を持ち、何者にも引かぬ『勇者ボルドー』の様なアノ男が。あの後の出来事でもそうだが、お前には苦勞辛苦を掛けるな」

「勿体無きお言葉に染み至ります。全ては我が身の錆、どうかお心を痛めませぬよう」

「その後の経過は…、あまり芳しくない様だな。私こそ未熟の身を思い知らされた。確かに、方陣に頼り過ぎると言われても返し様がない」

「いえ、日常生活には何ら支障は御座いませぬ。御側を離れる事になりましたが、私は常に御身の剣で在りましょう」

「ふふッ、この姿見では『連環の契』になってしまっぞ？アイリィンは大胆だな、くっくっく」

「御戯れを…」

途中から引き締まった空気を吹き飛ばすように、クーエンフルダは背伸びして長椅子から飛び上がる。

「よし、この話はここで終わりっ！アイリィ、折角先生が留守なんだから懲らしめる様な発見を見つけない、地下室の謎の魔窟を探検しに行こう！先生が泣いて、もう死ぬのは諦めますから許して下さい。って言うくらいのをさー！」

「良い案で御座ます。お供仕ります、我が主」

## 5話 旅で留守（後書き）

思い出したかのように登場人物の身長の並び。

ラミア>フミアキ>アイリ>クー と、こんな感じですよ。

説明が足りない足りない至らない。

それでも読んで頂き有難う御座います。

12/17 改稿

## 6話 旅で遭遇（前書き）

……等々「表現の幅が狭いより広い方が良い」と付け加えた R15 の実行される話を書いてしまいました。この話を上げるのに 相当悩みましたが up する事に。賛否両論あると思います。現代では法に抵触する行為ですので、不快に思うかもしれませんが。それでも見ていただけるなら幸いです。

## 6話 旅で遭遇

ジリジリと太陽が照りつける。『教導院』に楯突き太陽信仰を、一度敵に回した男には容赦なく、その力の限りの熱射が注がれていた。

慈悲は無く、夏と言う名の暴君が頭上に鎮座するこの世界。

目深に被ったフードは、まるでソール神から隠れ逃れる様にも見え、口は真一文字に閉じられ、良く見れば歯を食いしばっていた。

男は突然駆け出し、街道の側の林に駆け込む。

30過ぎの草臥れた男の顔には、焦燥がありありと浮かんでおり、唐突な行動に不審が見え隠れする。

辺りを見回し警戒の色を強めたその顔色に汗がびっしりと浮かぶ、気温に寄る発汗作用だけでは有り得ない量である。

林の木々が、男の緊張に引っ張られる様にさざめく。

暫しの沈黙、そして何かを確認するかの様に時を計る。遂に、男は手を動かし行動を開始する。

「……………はぁー！ー！。生き返るー！…、…つう、ぶるぶる、とつとつと。歳かねえ、切れが悪いわ」

ドゴオオオツ！と、何処かで何かが地面に突っ込む音が聞こえた。

が、大開放中の為に気づかない。

「ふいー。やつぱり最初に水分補給し過ぎたか、……………ぶわっくつしよい！んー、何時もならそろそろ家に来る頃合だな。クーが噂でもしてそうだ」

かちやかちやとベルトを引き上げ鼻を啜る。

フミアキは木々に若干の栄養素を振り撒いて、晴れ晴れした表情を浮かべる。

水筒を取り出し、旅に置いては貴重な水で手を洗うと、腰に付けた布で手を拭き汗を拭いた。

「いやー、青空の下でのこの開放感。これそ旅の醍醐味だ」

うんうん。と、一人で納得する。また何処かで、ゴスウウ！と、何かが木にぶつかる音が聞こえる。

「はて、何やら音が…。まっ、気のせいかな。木の中だけに…」

ドヤ顔でお世話になった木に呟く。もしこの木に腕の一本でもあったのなら、気絶するまでぶん殴られる事間違いないだろう。

ガスガスガス！と、木を連打する音がまたまた聞こえるも、荷物を背負い直して街道に戻る。

「あー、久々の一人の時間はいい。アイリさんが来てから快適に過ごせる様にはなったけど、元々独り身が長かったからな」

歩く。

「やっぱり部屋に籠ってるセイか身体が鈍ってる。王都から三日目。明日辺りには、筋肉痛が来てくれるといいけど…こなかつたら怖いな」

ブーツを鳴らし歩く。

「そろそろ、クキの実の木が見えるか。アレって梅みたいに酸っぱいから、疲労回復の効果が期待出来そうなんだよな。街道に生えるのは自由に取っていいらしいけど、そこはモラルに気を付けんとお天道様が見てるってね。そう言やあっちの昔でも、街道を利用する旅人の為に果樹を植えたって聞くし。確か、戦時中は果樹を切り倒して、進行の邪魔をしたとかもあったよな」

歩く。

「昔の人の効率に対する思いには執念を感じるね。一の事柄に二も三も含ませる、こつ言つのを『一を似て十全と為す』だったか。いや、そもそも現代社会の専門性が細分化し過ぎているな、過去の効率とは方向が違う。言つならば『百細を似て一と為す』か」

汗を拭い歩く。

「そうだな、例えば料理に使う出汁つゆ。煮物専用とか、鍋つゆ専用とか、まあ色々ある。こつ言つのを買い慣れてしまうと、みりんと醤油と砂糖、これらで元を作ると言つ発想が薄くなってしまふ。一本で簡単に作れて便利なんだけれど、要は応用が効かなくなるんだよな。酷い例だと、冷食でお弁当専用焼鮭なんてのもあったな。」

鮭の切り身買って、お弁当枠で切ればいいって話なんだけど、時間短縮にはなるんだろうけど…主婦の朝は戦争だって言うし、うん、全国のお母さんは偉大です。感謝してお弁当は食べよう」

何かに向かって言い訳しつつ歩く。

「おっと、三叉路に着いたって事は…、ふむ、ここから真っ直ぐ北だったな。それでは、そろそろショートカットするかね。……誰も居ないよな」

足を止める。

「あー、本日は晴天也、本日は晴天也。……ん、んっ、んああー、此方より、彼方へ、続くぞ連なれ重なり往く、阿、吽、走者の蝉の聲、外天、正天、運龍昇らば快天の、魂に聞こえし奥山彦」

ブーツの踵を鳴らすと地面に方陣が現れる。地陣より微量の光が立つ。

「 『韋駄天ブーツ』 発動」

一歩力強く踏み出すと、瞬間に身体が加速する。頭を低くして抵抗を抑える。

もう周りの景色は凄まじい速さで過ぎ去って行く。

「この、加速、には、やはり、慣れ、ない。誰だ、こん、なの、作った、のは」

歯を食いしばり足を動かし空気を切る。言う為れば、急な下り坂を走り抜く感覚。

後半は意味もない愚痴である。

「はあ…、帰った、ら、改良、せねば」

『光具』と言われる物がある、方陣の効果を限定的ながらも物の中に籠める技法。

方陣の短所は、その発動までに掛かる手順の煩雑はんざつさが一番に挙げられる。

仮に戦闘中などは、一々陣を書き、紋言を唱えてる暇はない。

故に、予め出来上がった方陣を物に籠めた光具は『形ある紋言』のみを持って発動されるので、年若い者に好まれる。

大した力も持たないフミアキに取って、補助具である『光具』は、実にお誂え向きだった。

作成するにしても、籠める際に力の強弱は関係なく、如何に正確に方陣図を刻めるか、如何に丁寧にのべつ幕なしに力を籠められるか、如何に方陣図を多く盛り込めるか、如何に自身の想いを乗せられるか、が効果に強く影響を及ぼす。

そうフミアキは思っている。

このブーツ、『韋駄天ブーツ』はフミアキの自作の光具で、旅の  
共には必ず履いて行く。

効果は、歩いた歩数を靴に貯める事で、発動後爆発的な速さを得  
る物である。

体力が貧弱で足の遅いフミアキにとって、『韋駄天ブーツ』を使  
って漸くこの世界の一般人の旅程と並べる。一般人は一般人でも女  
性の方で、と言う事実にはフミアキの心は深く抉られたそう。

目紛るしい景色の変化は、やがて木々の緑を映すだけになってい  
た。

目的地が近づいてる事に、安堵の溜息を付きそうになるも、その  
口は加速に抵抗する様に固く閉じられている。

早く目的地に到着して身体を休ませたい、と安堵に緩む意識を立  
て直す。

この高速走行中は、拳動がその速度に寄って著しい制限を受ける。  
そう、

「ん？な、黒い……」

車は、

「え？！ちよ、とま……」

急には、

「うおおおおおおおおお……」

止まらない、のだ。

ゴツチン、と言う音と共にフミアキは意識を飛ばす。

そしてフミアキに突撃された黒い塊が、ドオオオンと音と共に倒れる。

三つの息遣いが暫し森に溶けるも、直ぐ様黒い塊から唸り声が漏れる。

「グルウウウツ」

「……………っ！？」

「……………」

唸る声、息を飲む声、フミアキは今だ気絶を続ける。  
そして、その場面におかわりが入る。

「ふっざけんなああああ！！あんのお、う”あかがああああああ  
あああ！！！！」

「もう許さない、もう許さない、もう許さない！あんた！邪魔よ！  
」

言い終わるよりも先に女の剣が一闪すると、黒い塊が無常にも切り刻まれる。

「熊如きが！あたしの邪魔すんなっ！！いい？！あたしはひっじよーに苛立っている！あの馬鹿が、突然馬鹿みたいな速さで走り始めて……！このあたしが追いつけない、これ以上離されないようにするの到手一杯になるなんて！！」

燃える様なカーマインのショートを震わせ、アンティックゴール  
ドの瞳は怒りを隠す事なく露にしている。

「……あの」

「つつたく！熊如きのセイで、あの馬鹿見失っちゃったでしょ！腹立たい、苛立たい。もう、この辺って四角頭の懐よね。ならいいわ。行き先は絞られる」

「あの……!!」

「あん?!うっさいな!あたしは忙しいのよ!」

「じ、じめんなさい」

カーマインの少女は、か細い声を一喝する。ん?と首を傾げ、漸くその場に居た小さな少年に気付く。

「あんた誰?なんでその馬鹿は寝てんのよ?」

時刻は夜、少女は石造りの家を前に立っていた。

傍らにフミアキを背負っている小さな少年がいる。

フミアキを背負おうとした先に「運ぶよ、兄ちゃんを持ってくのは俺の仕事だし！」などと言われたのだ。

どうやら、この少年とフミアキは顔見知りの様で、随分慣れた手つきで背負っている。

手が塞がっている為、少女が扉を開けようとする前に乱暴な音と共に扉が開かれる。

150にも満たない小柄な身体、けれど立派な髭と腹が壮年の貫禄を出している。

髭の男は、大きな斧を背中に負いその覇気を溢れさせていた。

「お、お前！？何処に行つてやがった！心配したぞ！！」

「父ちゃん、ただいま！」

覇気が霧散する。親子は二人で抱き合い、無事の再開を喜ぶ。

フミアキは投げ出され地面に転がされる。

「お前が戻らねえって言うんで、今から出る所だったんだが…よかった、本当によかったぞ」

「ごめんよ父ちゃん、森で熊に見つかったちゃって…でも、この人が

助けてくれたんだ！」

放って置かれた少女に父親が漸く気付く。

少女を見ると何とも複雑な表情を出し、息子を横に置き向き直る。

「ふん…、息子が世話になったようだの。一応感謝するぞ、丸頭」

「別に？子供の世話くらい出来ないもんかしらね。槌を振るうばかりしてんじゃないわよ、四角頭」

横から、父ちゃん！と、諫める声が聞こえたが二人は睨み合う。

「……まあいい。随分懐かしい顔も居る事だ、息子の礼もある。中に入れ」

質素な室内に通され、少女は勧められたテーブルの椅子に腰掛ける。

フミアキは何時の間にか長椅子に寝かされていた。

「母ちゃん、グリスが戻った！客もいるから茶あ出してくれ！ほれ、お前も母ちゃんに顔見せて来い、ったく」

「うん、お姉ちゃん、またね！」

「あー、改めて礼を言うぞ。グリスを助けてくれて感謝する。僕の  
名はグリゴス、巖窟族であ光具鍛冶を主にやっとなる」

「見れば分かるけど徒人族。で、あたしはコリー。あの子を助けた  
のは成り行きだったけどね」

言っても危ない所を防いだのは、そっちの男らしいけど。と、  
続けその時の説明をする。

「ぐっはっはっは！フミアキらしい、全くこいつは変わらん！」

大きな髭を揺らし破顔する。

コリーは目を剥く、気難しいと言う言葉の代名詞が笑うのだ。

「……こいつ、何なの？知り合いみたいけど」

「なんだ、嬢ちゃんはフミアキの連れ合いじゃねえのかい」

「誰が、偶々、偶然、気紛れで助けただけなんだから」

「こいつあな、2年程前までここに置いてやった縁がある。言っ  
しまやー、ただ、それだけだ…。しっかし、見ねえ間に随分と痩せ  
やがったな」

飯くつてんか。と、フミアキを見ながら話すグリゴスの顔は  
穏やかだった。

それだけで、グリゴスとフミアキの関係が透けて見えてきそうだ  
った。

「こいつの用は大体予想がつく。だが嬢ちゃんよ、お前えなんだっ  
て森に居た？見た所、仕入れの商人って風には思えねえな」

「…」

「…」

あれ程豪気に笑っていた顔も鳴りを潜める。 厳い髭の男と紅い髪  
の少女が睨み合う。

グリゴスが少々感心する。 年若い少女が、鋭い眼光に気負いもせ  
ずに向き合ってる。

何時まで経っても埒が明かない、もう仕舞だ。 と言わんかの様に、  
この場を流す事にした。

それにこの少女、一応息子の恩人である事を思い出したようだ。

「まあ、いい。何の目的があるか知らんが、兎や角言つめえよ。だがな、家族に手を出すな、それだけは言っておくぞ、丸頭」

「……誰もそんな事しやしないわよ、この四角頭」

こうして、フミアキは気絶したまま夜が更けていった。

## 6話 旅で遭遇（後書き）

ご意見、ご指摘ありましたらお願いします。

漸くファンタジーっぽい種族が出てきました。

どう見てもドワーフっぽいですが、本当にありがとございました。

11/19 矛盾点を加筆修正。

12/18 改稿

## 7話 旅で団欒（前書き）

上中下の3話構成で考えてたのに収まりそうにない……。  
ぐだぐだですが、それでも宜しければどうぞお読みください。

## 7話 旅で団欒

「ぐっ！……はぁ……はぁ、あ、あつたま痛っ」

フミアキが目を覚めたのは翌日、頭の中を鈍痛が走る事で意識が戻る。

ベットに寝かされている事に気付き、ゆっくりと頭を上げて部屋を見渡す。

「……やれやれ、どう言った魔法かね。なんとも懐かしい」

この場所は、2年前までフミアキが使わせて貰っていた部屋だった。

「移動中、熊？事故って……気が付いたらグリゴスさん家って。何がどうしてこうなった」

起き抜けの頭に鈍痛を抑えて、意識が途絶える前を思い返す。記憶を掘り起こす事と、鈍痛がせめぎ合って、暫し思考停止に陥る。

「あ、兄ちゃん！起きたんだね！」

そこへ、何とも高い子供の声が元気よく張られて、フミアキが改めて悶える。

「お、おはよう…グリス君？ちょっと声抑えて貰えますかね」

「あ、ごめんね。どう起き上がれそう…？」

つい口を突いて出てしまった言葉に後悔する。

子供に取って声が高い事も大きく声が出てしまうのも当たり前のことであり、まして自分を心配しての行動で尚更である。

「すみません。少し頭が痛くて、ですね。もう大丈夫なので気にしないで下さい」

「朝ご飯だけど、どうする？部屋まで持ってこようか？」

「いえ、それには及びません。グリゴスさんにも挨拶しないといけませんから」

やんわりとグリスの提案を断り、登る痛みを表情筋に力を入れて黙らせる。

心配そうにこちらを見てくるも、子供に気を使わせない様に何時も通りを装う。

「おう、やっと起きたか、とつとと飯にするぞ」

「お久しぶりです。グリゴスさん、それに、パルさん。お二人とも変わらないようで」

「あらあら、フミアキ君は相変わらずねえ。もう、身体の方は大丈夫なの？何時も思うんだけど、無理しちゃ駄目よお。フミアキ君は何にも言わないもんだからおばさん心配になっちゃうのよ。どう、向こうでいい人でも見つかったかしらあ。仕事の方は順調みたいなんだけど、偶にはこうやって顔出してくれると嬉しいわあ。そうそう、前もって言うてくれるとフミアキ君の好きな物用意するだけだね、突然だったもので、あんまり大した用意も出来なくてごめんねえ。ああ、でも身体に触るから、朝は軽くしておいた方がいいかしらあ」

「だあ！母ちゃんはちつとは黙つとれ！話が進まんぞ、お前も突っ立つとらんでとつとと座れ。母ちゃんの長話が止まらんからな」

椅子を引いて食卓に着く。

この家の住人に合わせて作ってある為にフミアキにとっては若干低めであるが、昔使っていた食卓台が置かれている事にほろりと感謝の念が湧いてくる。

その食卓台は、よく見ると二人分あった。

「……」

「……」

期せずして隣に座る女性と目が合う。

カーマインの髪をショートに散らして、アンティークゴールドの瞳と勝気な眉がフミアキを覗いている。

そのまま見つめ合ってしまうも不似合いな瞳の若い女性に留められる。

歳は10代後半だろうか、強気な眉がピンと二本乗る往古の黄金色の瞳は、アンバランスな印象をフミアキに与えた。

しかし、古色の瞳に若い生命に溢れた眉、新旧が渾然一体に作られた美しい造形だったから。

「……なによ」

「あ、ああ、いえいえ、なんでもありません。おはようございます。初めまして、で、よろしいですかね、フミアキと申します」

「……」

「かあー！フミアキ、何時もいつてんだろっが！その鯨張った言い方はやめろ！飯が不味くなる！嬢ちゃんも嬢ちゃんだ、飯時にそんな顔してんな。いくら息子の恩人だろっが、あんまし過ぎるとたたつき出すぞ！」

家主から、バックアタックと後方支援が同時に飛んでくる。

性格が大雑把な為か面倒は個別に対処するより、引っ括めて両断するのがグリゴスの持ち味だった。

「ふんっ、コリーよ」

「はい？」

「…だから、あたしの名前。コリーよ」

ぶつきらぼうに述べて、視線を外す。釣られてフミアキも視線を食卓に戻す。

それを合図に、グリゴス家の遅めの朝食がようやく始まった。

食事が終わり揃って緑茶を啜る。

巖窟族の育てる茶葉は、巖窟族そのものと言わしめる程渋い事で有名であり、岩窟族以外では滅多に口にされないが、物好きが愛飲する事でも有名だったりもする。

因みにこの巖茶は、子供には渋すぎる為飲ませるのは禁止されていたりする。

禁止されると手を出すのが子供の常だが、余りに苦く渋いので子供は誰も嫌う、まるで薬だと顔を顰める。ので、グリスは朝食が終わればすぐ外に出ていった。

「フミアキ、お前どう言つ了見で戻ってきた」

「あんだ」

「わあーってる。お前、叶えたい夢がある。そう言つて出てつたな。お前は、光具造りの才がある、こりゃ、儂ら巖窟族でも届かん所にあるやもしれん。ここで光具造りを修得し、鍛え上げりゃあの話だな。」

巖窟族の光具ぬちだったら、喉から手が出るくらいのモンだ。それを捨ててお前は行つたな、叶えたい夢があるつてよお」

「…」

「そんだけの気概を持って出て行った。ならよ、なんで高々2年で戻って来た。もうお前の夢は叶っちゃったんか？もういいのか？」

「グリゴスさん、私の造る光具は『外法』です。今まで巖窟族の方々が造り積み重ねた技法に泥を塗ってしまします。貴方達の技に尊敬する、だから私は光具造りを本職にする事は出来ません。この技は埋めて置くのがいいですよ。一般常識がある者なら激怒するでしょうし」

「はあ…、変わんねえなフミアキよ。高が異色の技術だ、10年もすりゃお前の遣り方が世の常になるかもしれんぞ」

「それなら私がせずとも、時代が技術を求めましよう。その時が来たのなら、私が心の中で先駆したとほそく笑む、それだけでいいです。それに、私にはまだまだやりたい事が一杯ありますから、『槌を取り替えるな』とは岩窟族の先達の言葉ですよ。私は筆を握るだけで手一杯ですよ」

「あー言やこー言う、お前って奴は本当に七面倒くせえ。わーったから、要件を言え。態々訪ねてきたって事は、なんかあんだろ」

「いやですね、グリゴスさんの顔を見に来ただけですよ？それに、パルさんの美味しいご飯とお茶を飲みに来るだけでも価値はあります」

先程までの巖茶の様な空気が一気に薄くなる。  
代わりにグリゴスの顔が渋くなり真っ赤になって沸騰し始めた。  
パルが「あらら、おばさんからかつちや、ダメよお」と嬉しそうに言ってる事にも原因があるのかもしれない。

「フーミーアーキーー！！そこに首置け！！巫山戯やがつて、今日と言つ今日は許さねえからな！！いや、今日こそ許さねえぞ！！」

「わーわー！冗談！冗談ですって！グリゴスさん落ち着いて落ち着いて！」

黙れ！逃げるな！首を置いてけ！え？これなんて置いてけ堀の妖怪？などと追いつけ追いつけ逃げの二人劇場を始めてしまった。

「……ねえ、これ、止めなくていいの？」

「うふふ、懐かしいわね。フミアキ君が居た頃は毎日がこんなもんだよ。最近のご無沙汰だったし、あのひとつたらあんなに喜んじゃつてえ」

これに驚いているのはコリーただ一人で、二人はとても自然に逃走劇を繰り、パルは笑顔で湯呑を片付けている。慣れたモノであつ

た。

「で、命の恩人の誕生会があるから、御山に入る許可と鍛冶場を貸してくれってか」

「誠を持って仰る通りに御座います。何卒グレゴス様の御力を持って、二つの御許可を采配して頂きたく存知上げます」

ギン！と眼光が、まだ足りんのか？と問い掛けてくる。

もう既に、フミアキの身体はぼろぼろで倒れる寸前だが、グレゴスの前正座して会話している。

それでもフミアキを気絶させずにお仕置きするには、技術を要するので骨が折れるが、実に巧みな仕置き具合であろう。

「……いいだろう。だがよ、お前一人で御山に行ったらどうなるか分からねえ。嬢ちゃん、こいつに付いてってくれんか」

「なんであたしがっ」

「フミアキは体力がねえ。 그리스と喧嘩しても負けんだろっ。そんなが御山に入っても、火見るよりあきらかだ」

「あたしが付いてく意味が分からないわよ」

「そうですねよグリゴスさん。 コリーさんも用事があったてここに来たんでしょっし」

「なんなら護衛の報酬も付けてやる、儂が造った光具の3級、それに『準範士』も乗っけてやるぜ」

「はっ?! 『準範士』?! それって上から二つ目……!」

「これでも日々成長してますよ。昔の私と思わないで頂きたい」

「正確にや、上から三つ目だがな。 いい加減『準』はとっちまいたいがよ」

「普通に言ったら、『範士』が最高位でしょ…ウソ…本当に? 光具

鍛冶に疎い奴でも、『範士』が類い稀な功績を残す様な存在ってくらい知ってるわよ……」

「魑魅魍魎の巢食う王都に2年も生き延びたのは伊達ではないのですよー」

「どうだ悪かねえだろ。儂の見立てなら、お前さんは『速さ』中でも『剣速』で押す戦法を使うと見た。だが、そう言う奴等は得てして防御が軽くなる。そりゃそうだ、重いモン身に付けてりゃ『速さ』が死んじまう」

「……合ってるわよ。3級の光具でも『準範士』が乗れば、逆に使い易いわね」

「化け物共をちぎっては投げちぎっては投げ、その中で遂に私は覚醒をし……」

「嬢ちゃんも知ってたんだろうが、巖窟族の光具『防主』方陣はそうそう貫けるもんじゃねえ。お前さん強くなるぜ」

「好条件ね。高々護衛で、しかも丸頭を守る為になんてそこまでやるのかしら」

「そして化け物に囚われた謎の美女を救いだ：あ、パルさんお茶ありがとうございます」

「はんつ、儂らの神聖な御山を、丸頭の血で汚したくないだけだ。なんだ嬢ちゃん、忙しくて“お使い”もできねえのかよ？」

「へえ、言ってくれるわね。あの“ケチ”で“頑固”で有名な四角頭が、随分太っ腹な話をするから、本当に報酬が出るか心配になっちゃってね。ああ、見れば大した太っ腹よね」

「ふう…、パルさん今年の巖茶はいい出来ですね。この深い渋み、うん、作り手の苦勞が立派に報われていますよ」

「…」

「…」

「ええ、全くそうですね。いやいや、そんな。本当の事ですよ。パルさんはまだ全然いけますって、グリゴスさんが居なければ私が」

「…」

「…」

「好感触、また、そんな事言つと私も本気を見せてしまいますよ。はははっ、ついにゴートさん家のゴーン君も春が来ましたか。羨ましいですね」

「…」

「…」

「いえいえ、私なんて未だに男やもめですよ。いや本当。まあ独り身が長かったですからね。ああ、そうですね、ガーガリ君がね。それは困った…ぶわっくしょ」

「「うるせえ(さい)!!!」」

「おおっ、何ですか二人して。て、もう話し合いは終わったんですか?」

「やあかましいいいいい！お前が御山に入りたいっつーから儂が骨折つてやつてるに、さっきからぺらぺら脳みそのねえ話を喋りくさつてからによぉー！」

「こっちは大事な話をしてんのよ！あんた、本当にやる気あんの？！」

「あのですね、ガーガリ君も今難しい年頃なんですよ？あの位の年の子は、手を出すのも、放っておくのも微妙な感じなんで加減がしづらいんです。どうしたモノでしょうかね」

「ガンスん所の糞倅なんぞどうでもいい！いいか！とつとと嬢ちゃん連れて御山に行つてこい！これは儂が決めた！もう覆らん！これで仕舞だ！母ちゃん、儂が出る！ガンスん所のハナタレめが、性根叩き直してやる！」

「いつてらっしやい」と、パルに送られて怒って出て行ってしまった。

呆然と見送るのは二人の男女、コリーが「はあ…」と諦めた様に息を漏らした。

「しょうがないわね、山の護衛は引き受けるわ。で、その山って何処の？とつとと行くわよ。あーもー頭痛い」

「え？え？」

フミアキを引き摺りながらコリーが家を後にする。

そんな二者三様をパルは笑顔で見送るのであった。

## 7話 旅で団欒（後書き）

用語解説？

バックアタック 後方から強襲される。これをやられると高い確率で後衛があぼんする。

光具ぬち 光具造りの職人の事。

槌つちを取り替えるな 巖窟族では自身の槌を大切にします。

真新し槌は新人。古い槌は熟練工。  
槌を取替取替してるぬちは信用されませ

ん。

あー言やこー言う あー言やこー言う。フミアキみたいな人。

光具3級 数字が若ければ若い程、なんかよくわからないけどすこ  
くなります。

準範士 ぬちの職位。 『 』 > 範士はんし > 準範士 > 教士きょうし > 錬士れんし > 弟子 >  
見習い

錬士から一人前。教士から弟子をとれます。

大抵のぬちは、教士までです。準範士は巖窟族でも20人  
未満。

範士に至っては、2人です。

化け物と美女 フミアキの妄想。

ゴーン君 （岩窟族で）イケメン君、幼馴染のペートちゃんと

散々じれじれした挙句、喧嘩 仲直り 春到来 リア充

ちね。

ガーガリ君 ペートちゃんに横恋慕するも、イケメンに撃破される。  
根は悪い子ではないが、直情的過ぎる傾向がある。  
振られたシヨックで絶賛悪中。  
グリゴスさんの鉄拳が飛ぶ。

暇を見て、各話のあとがきにて用語解説？を付け足していきたいです。

ご意見ご感想お待ちしております。

12/18改稿&お詫び。用語解説を書くほど設定凝っていないので、この話のみとさせて頂きます。後設定書くと、書いたつもりになってしまつて本編で忘れそうなので…。

## 8話 旅で山

「本当にこつちでいいの？」

しっかりと踏み固められた土の上を歩く二人。

鉱山に続く幅広の道は、何十年も使い込まれカチカチになっていく。

「ええ、後は道なりの一本ですから迷う事はないです」

「何これ？こんなんで護衛なんて意味あったのかしら」

「そもそも鉱山の奥に行く訳ではないんですよ。グリゴスさんもアッレで心配性だったりするんです」

はあ…と、コリーが呆れた溜息を着く。

鉱山に続く道は穏やかであり、何の危険の予兆も感じ受けない。

まだフミアキに追いついた時の森の方が、緊張感を持てたかもしれない。

今向かっている鉱山は、坑道が伸びきっていて全盛期の面影が見受けられない。

そんな若干寂れた鉱山だが、その分道は踏み固められ歩き易く、

長年道に染み込んだ人の臭いから、獣も避けて通る為に安全と言えた。

「……あんたって、光具職人だったの？しかも準範士に認められる程の」

「いいえ、確かに趣味で少々光具を造りますが、私はぬちではありません」

空には神が鎮座し、今日もその熱を降り注いでいる。

「すごい褒め様だったじゃない。あたしは“偏窟族”が自分の所以外の種族を褒めた事なんて初めて見たわよ」

「コリーさん、余りグレゴスさん達の事を「四角頭」だの「偏窟族」など呼ばないで下さい。彼らは不器用ですが、気持ちがあまらぬ直ぐないい人達です」

ピーチチツと野鳥が囀る。森は新緑の季節に伸ばした枝葉を方々に、光合成を勤しむ。

「はん！あいつらだつて言ってるわよ「丸頭」「ほんぞく凡族」ってねまったく舐めんじやないわよ」

「はははっ、凡俗と掛けているんですね。いい得て妙とはこの事ですか」

バサササと名も知らぬ野鳥が飛び立った。

フミアキより背の低いコリーはフミアキを睨<sup>ね</sup>め上げる形になる。その剣呑な空気は周囲を巻き込み、野鳥は避難を余儀なくされた。

「あなた……あたしに喧嘩売ってるの？」

「コリーさん、笑って受け流せばいいんですよ。“大人”はそうやって世を渡るんです」

それはまるで“子供”だと言ってる様に聞こえ、瞬間コリーの殺気が膨れ上がる。

何時の間にか二人の足は止まり、一方は睨み一方は見て視線を交差させる。

「巫山戯るな！巫山戯るな！巫山戯るなっ！あたしが女だからって舐めるのもいい加減にしまっ！」

「喧嘩も売っていませんし、舐めてもいませんよ。もう少し肩の力を抜いた方が、心持ちが楽になります」

ですから、と続けた言葉は、彼女の左手に握られたモノに寄って遮られる。

「……」

「……はあ」

剣を突きつけられてるにも関わらず、顔色一つ変えずに溜息をつく。

普段キツイ突っ込みをするグリゴス、アイリは振るう力を理解している。

だがこの少女は、感情に振り回されている。

年若い証拠でもありフミアキは頭を抱える。

(説教なんて柄じゃないんだけど、そもそも好き勝手生きてる自覚はあるし年だけくっっている奴に諭されたくはないよなー)

未だにこちらを睨みつける古色の瞳が、少し不安げに揺れた。

恐らく出した手を漸く理解し、その収めどころに困っているのだろっつ。

「……頭は冷えましたか？では行きましょう、まだ目的地にも着い

てないので」

フミアキは面倒事を、後回しにしたようだった。

空気が重い、空は晴れ渡り周りは山々に囲まれ王都の様な騒がしさは微塵もない。

実に牧歌的で心がゆったりとしてくるハズ、にも関わらず二人は無言のまま歩く。

鉾山の入口を通り過ぎ、山に沿って歩き始めるフミアキに声がかかった。

「…鉾山に用があつたんじゃないの」

「ああ、ここは坑道が伸びきっていて、余程奥に行かないとめぼしい物は採れないですよ。これから向かうのは剥き出しになってる崖ですね」

暫く歩くと、切り立った山肌が見えてきた。

「ここは意外といい物が見つかるんですよ。私の秘密の場所なんです」

「…」

コリーが見上げる崖には、とても彼が言う様な「いい物」があるとも思えない、普通の岩が剥き出しになっているだけであった。

「さて、ちょっと上まで行ってきますね」

『韋駄天ブーツ』発動。怪訝な顔をしてるコリーを余所に『形ある紋言』を唱えると“崖を垂直に駆け上がって”行った。

「は？はああああ？！」

下から素つ頓狂な声上がるも、凄まじい速さで駆けるフミアキには聞こえなかった。

中腹に出っ張りがあり、手を掛けて乗り上げる。

「ふう、よかった。まだ誰にも触られてないな、確かこの辺に……あつたあつた、よつと、む、こつちに繋がってるか」

2年前までこつ言つ穴場を狙つて採掘していたフミアキは、目的の物をコツコツ掘り始める。

鉱山に潜るより、外回りでちまちま採掘しはじめると意外に鉱物が見付かるのだ。

もちろん量は多くないのだけれど、趣味に使うだけなので十分だった。

小一時間程採掘に励み手の平大の塊二つに、それよりもずっと小さな塊を懐に仕舞い、昔設置したロープを手に取り帰る支度をする。

「これでこの場所はほぼ採り尽くしたし、残りは三箇所くらいしか残ってないな。まあ、そんなに来ないし別にいいか……怖くない怖くない怖くない」

「ヒイイイ、高い、怖い、揺れるううううう！登るのは一瞬だけど降りるのは本当に怖いいいいい！！」

ロープに体重を預けるもたつた一本しかない。

翼のない生き物にとって高所は恐怖以外の何者でもないし、気を紛らわす為に意味の無い事でも口にする。

「うおおお、風が風が！この悪戯好きの風さんめ！あ、ごめんない謝りますから揺らさないでえええ！などと男は訳の分からない事を供述しており、警察では余罪も含めて調査していくとの事です。以上、現場の崖より中継でした。えー、それではスタジオに戻ります。現場のフミアキさんありがとう。では次週の週間天気予報に移ります」

本当に全く意味がない、意外に大丈夫なのかもしれない。

「なんてぶぶぶつ、ああこんにちわ。散歩ですか？天気がいいし君達は自由に飛べて羨ましいですね。私も若い頃は空に憧れたものですよ、主に仕事に疲れた時なんかは……。えつ、あの、ちょっと、何を。あ、ダメです！ロープつついちゃダメエエエ！」

騒がしくしたからだろうか、何時の間にか大きな鳥がフミアキの周りを飛びしまいにはロープをつつき始めた。

仲間の鳥だろうか、つついてる鳥と一緒になりロープを啄みフミアキの顔が青くなる。

「え？え？更におかわりですか……。この旅が終わったら、私は可愛いお嫁さんを探すんです。それまで私はっ死ねない！」

鳥が寄って来た時点で降りる速度を早める。も、無情に鳥達が喝采を上げて最後のひと付きをする。

「オワタ」

頭上で人生を諦めたフミアキに対して、焦ったのはコリーであった。

大きな鳥が集まって来た時点で、コリーも嫌な予感をヒシヒシと感じていた。

「何やってんのよあの馬鹿は。……まさか落ちてくるって事はないわよね」

自分で口にしなから予感を否定するも、フミアキが落下する様を見て手が動く。

「ああもつ！えーつと……、紋言無理。陣だけでなんとか……?!」

高速で方陣を形成し、空陣を三つ四つと縦に重ねていく。

五つ目を創り始めたその時に、ドーン！とフミアキが背中から方陣を突き抜けて落下してきた。

辺りに土煙が立ち上る。

「い、生きてる…の…?」

急いで近寄って生存を確認する。

奇跡的にひどい怪我がないようにほっと息を吐き出すコリー。

「あいつが言った事がしみじみと分かるわ。森の件もそうだったけど一人で出すと本当にどうなるか分からないわね、これは」

しょうがないと言いたげに溜息をついてフミアキを抱える。

「なんだか馬鹿らしくなっちゃた。あーもーこいつ相手に緊張してたなんて…あたしの恥だわ。……って、何よこれ！なんでこんなに軽いのよこいつ!？」

若干女性としてのプライドを傷付けられながら、フミアキを背負いなおし来た道を引き返すコリーだった。

## 8話 旅で山（後書き）

うーん、キャラの性格が安定しませんね。

書き直すかもしれない、漸く書けたので取り敢えず投下。

ご意見、ご指摘ありましたお願いします。

12/18 改稿

## 9 話 旅で光具（前書き）

ずっと説明のターン。

## 9話 旅で光具

「やっぱり嬢ちゃんを一緒にやったのは当たり前だったな」

「この馬鹿いつもあんな感じなの？首に縄付けてた方がいいんじゃない？」

「…まあ、大体は間違っちゃいねえ。矢鱈滅多ら地獄の釜の蓋開けやがる」

それも自覚なしだ。と、苦い顔で締めくくる。

山から帰った二人を見て、正確には背負われたフミアキを見て岩窟族の壮年の男　グリゴスが重い溜息を吐いた。

「いや、語弊があるか……なんつーかよ、確かにこいつが蓋開ける事もあるが、大半が“勝手”に釜の蓋が開く……そう思える時がある」

「何よそれ」

「拾った当初からやけに事故が多い。気絶するくらいなら軽いモンだがよ、命に関わる奴が洒落にならんくらいに“遭う”…それでも何だかんだで生き延びてるからな。運がいいのかもしれない」

それって。言葉を飲み込むコリー、部屋の空気の温度が下がった気がした。

「この話はこれで仕舞だ。こいつを無事に連れ帰ってくれて感謝する。報酬の光具は後日に渡そう、調整もせんといかんそれに、フミアキが鍛冶場に入りや暫くかかるからな」

腰を上げ、フミアキの採掘した鉱物を手に持ち「儂は頼まれた奴をやってくる」そう言っつて部屋を後にした。

残されたコリーは、ベットに寝そべるフミアキを見つっ嫌な汗を拭う。

夏特有の熱なのか、それとも別のナニかのセイなのか、実に気持ち悪い汗だった。

「と、言っ夢を見たんです」

「コリーに起こされたフミアキは開口一番そう言った。

「…」

「おおう、その「何こいつ、いきなり馬鹿な事言ってるのかしら」みたいな目で見ないで下さいよ。寝起きになんて冷たい目をするんですか」

「「何こいつ、いきなり馬鹿な事言ってるのかしら」どうでもいいけどご飯が食べられるなら、パルさんが用意してくれるわよ」

「なんと…、態々口に出して言われてしまった。なんだか軽くあしらわれてますね。私昨日何かしましたか？」

「別に。ただ、戯言は受け流すのが“大人”なのよね？」

冷たく言い放つコリーは泰然としていて、どこぞのメイドを彷彿とさせる。

「笑ってが抜けてますよ…。一晩で急成長なんて少年漫画ですか」

若いつていいですね。などと独りで零し寝間着を脱ぐ。

昨日は旅装だったが、パルが怪我の確認と一緒に着替えさせられた様だ。

フミアキが折りたたまれた昔の普段着を掴む、その視界の端にカーマインの髪と同じ位に顔を真っ赤にさせたコリーが見えた。

「ああああああ………」

「なんです、年頃の女性がそんな大口開けてみっともない」

年上らしくコリーを注意する。コリーはこちらを指差し口をパクパクさせている。

「あんたが！いきなり！脱ぐからでしょー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！変態、変態、変態！あんたどの口が、あ、あたしが居るのよっ！！」

「と、言う割にはこちらをしっかり見ているコリーさんであった」

「うっうっうっう、うるさああああああい！！」

顔を真っ赤にさせてすぐ近くにあった椅子を投擲。ふっ、まだまだ子供ですねゲフウ。などと最後の言葉を残し、二度寝に入るフミアキだった。上半身裸で。

「嬢ちゃん、確かにフミアキが悪りいがよ…あんまし真面目に付き合つと話が進まんぞ。ちったあ我慢しろ、それか手加減して意識は残せ」

「五月蠅いわね！ちゃんと途中までは出来てたんだから！何もかも、ぜーんぜんんぶこの変態が悪いんだから！あたしは悪くない！」

鼻息を荒くして反論するも、若干涙目の少女にこれ以上は酷かと引き下がる。

グリゴスもあまりコリーの事を強く言えないのは、同じ経験者の体験故だろう。

「しょうがねえか、だが嬢ちゃん。ここからは僕の鍛冶場だ勝手な真似はすんなよ。それとこれからフミアキが“つけいれ”の作業に入るから、近寄るんじゃねえぞ」

顎でフミアキを指したグリゴスに釣られ、コリーが鍛冶場のフミ

アキに視線をやる。

ここは鍛冶場と言っても「鉄を打つ」鍛冶場ではない。

巖窟族では、「鉄を打つ所」も「光具を刻む所」も引っ括めて『鍛冶場』と言う。

フミアキは今、人が五人程入れる正方形の部屋にて、光具造りの一番の肝である“つけいれ”の作業に入っている。つけいれとは、光具の元となる素材に直接方陣を刻み込む作業で、一番神経を使う場面である。

「分かったけど、いつ始まんよ。ずっと見てるだけじゃないの」

「もう始まつてるぞ、手元よく見てみるんだな」

フミアキは手に棒の様な物を持ち、光具の元となる素材に定めたあかい石を、つつくような動作をしている。

「？」

「分かんねえか、まあ分からんだろうな。今フミアキは、小指の爪より小さい宝石に方陣を刻んでんのさ」

「はあ?! そんなの有り得る訳ないじゃない! 騙してるんじゃない

わよっ！小指の爪より小さい物？そんなのに方陣を刻めるはずない！まともにも外陣すら造れない小ささでしょ！」

「それをあいつはやってんだ、以前にトヨ豆に文字を書き込んでいたぜ？馬鹿みてえに小せえが、目を凝らして漸く見える、そんなくえ器用だ」

「仮にその話が本当でも！光具造りつて一瞬で終わるんじゃないの？！確かに徒人族は、光具造りじゃあんだ達に敵わないかもしれないけど…これが巖窟族の御技って奴なの……？」

説明してやるからこっちに來い。そう言ってコリーはグリゴスに連れられてフミアキの部屋が見えるその場から移動した。

「簡単に言っつてしまや巖窟族の伝古技（ひそい）でもねえ。アレがフミアキの『外法』よ、つっても儂らとは違つて視点の技術でしかねえんだがな」

年寄り共はかなわん。少し苛立たしげに履き捨て、巖茶を嚙る。

場所を移し、お互いに対面で机の前に座る。

パルが煎れた巖茶から渋く苦そうな香りが立ち上る。

「……どう言う事よ。あんだ達の御技でもなし、あたし達の国伝技でもないそんなぼんぼん新しい技術が、しかも光具のよ。出るはず

ないわそれとも“三角頭”の？」

「いや、そつちでもねえ……そうだなちよつくら長くなるが、話てるか。この光具造りの過程つてのは、三種族共にほぼ共通だ。これは間違いねえ。そもその始まりが『暗黒時代』の“おおきいもの”より、儂ら含め三種族に齎もたらされた技術だからな。細かい下準備が違うがよ、こりゃ交わる事のなかつた為だからだ。だがよ、光具に刻むつー根本の作業は決して変わる事はねえ。乱暴に言つてしまや、方陣を物に籠める。ただそれだけが、儂らはその籠める、刻む作業を『おおち』つて道具を使う。これは方陣を創る際の力を効率よく物に刻む、筆みてえなもんだ。ああ、知ってるだろうが聞け。嬢ちゃんが言つた様に、つけいれは一瞬で終わる。儂らぬちはその瞬き位の時間に命を懸ける。時間をかけ過ぎると何故か光具に方陣が定着しねえ。そんな短時間だ、刻める素材があんまりにも小せえと当然刻み籠めねえ。そこで先祖が編み出したのが『拡縮法』これは、素材よりだけえ陣を小さくして刻み籠められるつて一技法よ。これにより、三種族の中でも光具と言やあ巖窟族だと言わしめたモンだ。続いて生まれたのが『重着法』おもひつきりだな。この技法が編み出された事で二度、三度まで重ね掛けのつけいれが出来る様になった。これに寄り儂らの種族は光具造りでは不動の地位を築いた。まっ、三度つてのは範士くらいにしか出来んがな。儂が出来るのは二度までだ」

「ずずー、と巖茶を嚙り喉を潤す。

「でだ、『拡縮法』でも小指の爪程のモンに刻み籠めねえ。『重着法』使つても長時間続けて刻み籠めねえ。一瞬を二回、三回重ねる

つてのがこの技法の肝だからな。フミアキはよ、あのまま、“一日  
一晚”掛けてつけいれす……”

「だからどうして！有り得ないんでしょ?!」

ダン！と机を叩く。湯呑みが跳ねた。

「当然の反応だがよ、少し落ち着け。嬢ちゃんはフミアキの光具を  
発動を直に見た事はあるか？」

「……あるわ。山で、いきなりあいつ“崖を駆け上がって”行った  
わ」

「がっははは、どうだ非常識と思ったる」

「当たり前よ！何よ、造りも非常識、効果も非常識……だから『外  
法』？確かに認められないわ。こっちの常識が、積み上げた物が壊  
された感じよね」

「あいつはよ、儂らが線で刻むのに対して点で刻む。ひとつひとつ  
針で穴開ける様にな、昔聞いたが『どつとえ』みたいなモンとか言  
つてやがった。おまけに、本来なら外回りから刻み籠めるのが定石  
なんだがそれすらも無視だ。中から刻み籠んだ方が後の調整が効く

とも言つてよ。儂には理解出来んが、洒落臭くてフミアキのやる技法を真似てみた事があつたが」

「ずずずー、と湯呑を傾ける。」

「驚いた…あの“偏屈族”が徒人族のを真似たなんて」

「それだけおどれーたつて事だ。だがよ、座つてちまちまやってみたがダメだなありゃ。尻が馴染まない内に根を上げちまつた。息が続かねえ、今までの遣り方に慣れちまつた身体には無理だつたよな。んで、フミアキに詰め寄つた。「お前はどこで光具造りを習つてきた?!」「不細工なモンばつか造りやがつて!」てな」

「不細工…?」

「ん? そうだな、あいつの靴は儂らから見れば欠陥品だ。あくまで儂らから見れば、だがよ。フミアキの造つた靴は効果はずば抜けてる、のにな、ありゃ『形ある紋言』のみじゃ完全に効果を出しきらん。仕組みは分からんが歩いた歩数を力に変える。なんてヘンテコな条件がある。あれだけ性能のいい光具に態々縛りを付ける意味が分からねえよつたく」

「光具つてのは完全を意味する言葉でもあるんじゃない? そんな余計な事して、逆によく発動するわね」

「そつだ、光具ぬちは常に完全を目指す。欠点が無く、不備が無く十全に効果を及ぼす。それが“光具”ってモンだ。それも含めてフミアキに問いただした。そしたら奴はなんて言っただと思っ？」

「…」

「笑つちまうぜ「完全な光具に興味はありません！りすくのある武器こそろまんでしょう！はいりすくろーりたーん？笑止！はいりすくはいりたーんに命を掛けてこそその王道と言うモノです！魂が燃え尽きる程のくらいまっくす！ぼーいみーつがーるしたかつた…」とかなんとか、全く意味が分からねえ！」

「??？」

「儂も、今の嬢ちゃんみたいな顔しとつたんだろつな。本当に不思議でならねえ、光具の知識はガキより無いくせに、無意味に刻んでる訳でもない。フミアキはフミアキで、全く別の方向から光具を理解……してんだろつ。築き上げた技術も、積み重なる伝統も、あいづには関係ないみたいでなそう思ったら、んか馬鹿らしくなった。儂ら、いや儂がやってた事は一体何だつたんだろつとな。こんな歳になつて正に目が醒めた気分だつた」

岩窟族に生きてきた壮年の男の、独白だつたのか語りだつたのか、巖

茶を一気に飲み干し湯呑みを降ろす。

「儂が言えるのは光具に絡むあいつのみだ、他に知りたい事があったら直接聞くがいい。どうして嬢ちゃんがフミアキを“見てる”のか知らんが正面切って聞けば、案外簡単に教えてくれるかもしれんぞ」

「……なんであたしに、徒人族にここまで教えてくれるの」

「何故だと？そりゃ嬢ちゃんが聞いてきたからだろう」

がっはっはっは！まるで此方の答えを述べている様で肩透かす、フミアキの様な返事をしてグリゴスは席を立ち、部屋を出て行った。

まだ朝もやの残る中、村の入口には五人の人影が見えた。

「本当にお世話になりましたグリゴスさん、パルさん」

「フミアキ君、何時でも帰ってきていいのよお。おばさん待ってるから。あ、でも次はちゃんと連絡いれてねえ、うんと美味しいもの作って待ってるから。それと、健康管理はしっかりしなきゃダメよお。身体が丈夫じゃないと何するにしても、始まんないんだからねえ。フミアキ君、ただでさえ細いんだから食事はちゃんと食べるのよ？うちのひとみたく呑んだくれるのもダメよお、全くあのひとつたらちつとも聞いてくれなくてねえ。いくら強いからっていい加減歳なのを忘れてるのよお、きつと何時か痛い目に合うわよ。フミアキ君は賢いから、大変になってから気付くより、もつと先に分かっちゃうんじゃないからしらねえ。うふふふ、次来る時は可愛いお嫁さん連れて来て頂戴よお。おばさん楽しみにして待ってるから、したら岩窟族直伝の料理も作らなくっちゃね、ああ、本当に楽しみだわあ」

「母ちゃん……、いいから黙っとくれ。終わんねえよ」

「兄ちゃん、今度来る時はもうちよつと居てよね約束だよ！俺、秘密のお宝場所見つけたんだ！きつと兄ちゃんに負けない場所だからね！姉ちゃんもありがとう！また来てよね！」

「気が向いたらね、もうあんな危ない目に遭わない様につけるのよ」

「おう嬢ちゃん、これが例の報酬だ。紋言と使い方は一緒に袋に入れてある。大変だろうと思うが、帰りのフミアキも頼むぞ」

「ふん、別に帰りが偶々一緒なだけよ。まっ、ついでだから頼まれてやるわ」

「なんだか二人とも、随分仲良くなりましたね。似た者同士、通じるモノがあつたんですか？」

「誰が似てるって?!」

「だあ! 合わせんな丸頭!」

「それはこっちの言葉よ、四角頭!」

頭を突き付ける様にして唾み合う二人に、三人から笑いが起こる。

「 그리스君、 그리 Gosさんと 파르 Paerさんの言う事をしっかり聞いて、立派な光具ぬちになって下さいね。そしたら私の発見したお宝場所を教えますよ」

「うん！父ちゃんと兄ちゃんに負けないぬちになるよ！そしたら約束だね！絶対だよ！」

「ったく、ひよっ子のくせに生意気な口きくんじゃねえ。おいフミアキ、長老共の言う事なんざ気にすることたねえからな。……あー、なんだ、身体にきいつける」

「ありがとうございますグリゴスさん。拾って頂いた事から始まり、ずっとお世話になりっぱなしで…本当に感謝しています。グリゴスさんも、くれぐれも身体に気を付けて過ごして下さい」

そう締め括り、フミアキとコリーはグリゴス一家に見送られ、朝の涼しさがまだ残る内に、五日間滞在した岩窟族の村を後にした。

## 9話 旅で光具（後書き）

5秒10秒で考えた設定満載ですいません。

いろいろ付け足したり、用語解説してみたいのですが時間が足りない…。

書けたからすぐ投稿のパターンですので

ご意見感想ありましたらお願いします。

12/18 改稿

## 10話 帰還で首飾り（前書き）

漸く二桁目です。ファンタジーと銘打ってる割にファンタジーっぽくない様な気がしてならないですが、読んで頂けたら幸いです。

## 10話 帰還で首飾り

「この時を何度夢見た事か、苦難の道だった。何処までも続く道の上に、幾度も挫け心折れそうになっただろう…、だが私は負けなかった。意識を消される様な激しい攻撃を食らっても、その都度黄泉帰った

それは全てこの日を迎える為であり…！」

「黙んなさい周りに迷惑、注目引いて恥ずかしいのよ」

ドゴツ！コリーの一撃がフミアキの腹に鈍く刺さる。

帰ってきた事で気分が昂揚しているのか、演出過剰に捲し立てるもコリーが制する。

ここは王都に入るに一番大きい門の前、辺りを歩く人々は何事かと二人に目を向ける。

「ぐふう、ゆ、油断した…まさか着いたと思う瞬間を、狙い撃ちするとはっ」

「五月蠅い黙れもうすぐ私達の番なのよ」

グリゴス一家に見送られ六日、二人は漸く王都まで帰って来た。

大勢の騎士達が門を守り目を光らせるも、二人を見る騎士の目は生暖かった。

「そもそも、あなたが何度も気絶するのが悪いのよ。おかげですごく  
い時間食っちゃったじゃないの」

「えー、まるで私が悪いみたいに言いますが、気絶させてるのは  
コリーさんじゃないですか」

「あんたが！いつも！余計な事、するからでしょうがっ！」

「なんと言う理不尽…、でも手加減が随分上手くなりましたね。今  
の攻撃も気絶までいかないにしても、心に残る打撃…将来が恐ろし  
い」

「あんだねえ……」

フミアキの背中が後ろの誰かにつつかれた。「おおい、前空いた  
から進んでくれんか」コリーと話していたら、前の手続きが終わった  
ようだった。

「ああ、すいません。さ、私達の順番ですから行きましょっか」

膨れ上がって行きそんな怒気を誤魔化す為に、フミアキはコリー

の背中を押して受付に荷物を一旦預ける。  
しかしここで首を傾げる。王都を出立した時は、ここまで物々しい警備の騎士は居なかったはずである。

「何だか物々しいですね、何かあったんですか？」

「ん？お前さん知らんのか、明日は第二王女様の誕生祭があるだろうが」

フミアキの手荷物を調べている中年の騎士が呆れながらも答える。  
「王族の記念祭くらい知つとけよ」と言って注意されてしまった。

「コリーさんコリーさん、知ってました？」

隣で別の青年騎士に手荷物を見せているコリーにこっそり尋ねるも、何今更こいつ言ってるの？みたいな顔をされてしまった。一般常識だったらしい。

「はっはっは、お嬢ちゃんも大変だなこんな兄貴を持つちまって！  
よし、次は証明符を…」

中年騎士が破顔するも、コリーの眉が吊り上がる。  
腹の底から声を絞り出す少女に、中年騎士の腰が若干引ける。

「あー……にー……?」

「ぶっ、い、妹は怒りっぽくてですね。私も苦労しているんで」

調子に乗ってフミアキが中年騎士の言葉を繋げる。

限界ギリギリのコリーを今このタイミングでつつけばどうなるか、言わずもがな。

最後まで言い終わる前にフミアキの両足が崩れ落ちた。どうでもいいが、後ろに並んでる人達が可哀相だ。

「これが証明符よっ、で、こっちがこの馬鹿の分!」

受け取った中年騎士が目を剥く。慌てて直立不動に構える。

「こ、これは! コーリネファン様とは露知らず、ご無礼を、い、致しました!」

「別にいいわよ、こっちも任務中だったし。第二級特殊監視対象のフミアキよ、照会はいいわね?」

「はっ! 確かに確認しました、どうぞお通り下さい!」

最敬礼する騎士に野次馬の見物人を無視して、コリーは無視して、コリーはフミアキを引き摺りながらこつた返す門を後にした。

「あれ…コリーは…」

「漸く気付いたわね。たく、人に背負わせて楽しんで、いい身分よね」

「ですから、気絶させるのはコリーさんじゃ…はい、すみませんです」

ギロリと睨まれカエル、これだと直ぐにグリゴスさんレベルまで成長しそうだ。と、零す事もなく心に思うフミアキだった。

「態々家まで送って頂きありがとうございます。あー、久しぶりの我が家だ」

「ふん、それじゃ確かに送り届けたし、巖窟族の依頼は果たしたわよ。もう会う事もないだろうけど、あんまり巫山戯てどっかで死なないでよね」

「え？上がってかないんですか？」

「はあ？何でよ」

「いやだって、コリーさんまだ用事終わってないんじゃないですか？」

「だから！何言ってるのよ」

「アイリさんに報告しなければいけないんですから、ここで一緒に済ませておくと二度手間踏まなくて楽でしょう？」

その言葉を受けて、コリーが身構える。

ここはフミアキの借家、中には当然メイドのアイリが主人の帰りを待っている、かもしれない。

「あんだ…どうして」

「簡単な事です。アイリさんが教えてくれたんですよ」

「うそつ、本人には知らせないって…」

ニヤニヤするフミアキを見て、はっとコリーが口を手で塞ぐ。柳眉を逆立て、やられたと言っ言葉が脳裏を過ぎる。

「あー、やっぱりそうだったんですね。いや、そうじゃないかなー  
と  
思  
っ  
て  
ま  
し  
た  
よ」

得意気に引っ掛けた事をバラすフミアキに堪忍袋の緒がどうにかなる。

自然な動作で剣を抜く。冗談では無く、頭に血が登り上がる。

「クロス」

「殺してどうする、この馬鹿者めが」

突如現れたアイリにコリーの剣が受け止められる。  
凜々しい声と共にグラッシュブルーの髪が摩く。

「アイリー…！痛っ」

「簡単に暴走しおつてからに、少しは成長するかと思つたらコレか、腹が立つたら服に隠れている場所か後の残らぬ方陣を使えと言つた  
だろっ」

頭頂部を抑えてうづくまるコリーに説教をするアイリ。

やはりその顔は出立時と変わらず無表情だった。

先ほどまでの教官然とした喋りではなく、普段の丁寧な口調に戻しフミアキに綺麗なお辞儀をする。

「フミアキ様に至つては、健勝の様で安心致しました」

「ただいま戻りました。でも、前の言葉が無ければもっと嬉しかつたんですけどね…あははは」

「そうですね、もう暫くすれば我が主が参られます。旅の埃を落と  
して身を清潔にして下さい」

つまりは、薄汚れた姿でクーの前に立つな。と言う事でそのまま  
フミアキは風呂場に直行した。

背中が若干哀愁を誘つ。

「何時までそうしているつもりだ。とつと報告をしろ」

「うう… アイリーン様、すごく痛みが残るんですけど…」

「ここではアイリだと言っただろうが。お前も主が参られる前に身支度をしておけ、そのままの姿で拝謁なぞ私が許さん」

口調が変わるうとも、至上主義に掲げている主への扱いは変わりはない。

出来の悪い部下を躡る様に振舞うその姿は、この館のヒエラルキの頂点に君臨する冷酷な女帝そのものだった。ただしクーは除く。

「…もう遅いか。流石は我が主」

「…は？」

「いい、どつちやらもつすぐ到着する様だ。お前の報告は主と共に聞け」

どつちやってか、クーの到着を予感しコリーの仕事を下げる。

ここからは、アイリのメイドとしての仕事が始まる。彼女の主を  
持て成す事はあらゆる仕事の上、最優先に位置付けられる為である。

「先生帰って来たんだってー！？」

バッタンと扉にダメージを与えつつ、クーが参上した。

「もー！先生何処にりよこ…」

言葉が続く意味を口が飲み込む。そしてフリーズ。

「おや、クーですか。こんにちわ、ん？どうかしましたか」

わわわわわわ…、などと不明瞭な羅列がクーの口から出てくる。  
わ、が連続する度にクーの顔に朱が差す。

「何ですか、言いたい事があるならしっかり言って下さいよ」

「わーーーーー！！先生の变态ーーーーッ！！」

アイリに言われた通りに汚れを洗い流して、着替えてる最中だった。

それでも下は履いていたのは、せめてもの救いだっただろう。

「んあで、しょ斎で着替えてるのお！？」

「アイリさんに言われて風呂に入ってたからであり、上着がこっちにあったものですからね。実に完璧な説明」

別にいいじゃないですか。と、布で頭をこしこししながら書斎を歩く。

乱雑に拭き終わり、いつもの上着に袖を通し話を続ける。

「君と私の仲ですから」

「え？え？！そ、そんな…仲だなんて…先生何言ってるの」

クーが茹でリンゴの様な顔にまで紅くして俯いた。

フミアキはもう一度布で髪をふきふきしている為に気が付かない。

「同性に見られるくらい何とも無いですからね。ふう、さっぱりした。って、随分と面白い顔になってますけど大丈夫ですか？」

「あー…、うん、ソウダネ。ナンデモナイヨ？」

呼吸困難に陥る前に、なんとか復活したクーが硬く首を振る。

どうやらまだ動作不良が起きている様で、見かねたアイリが助け舟を出す。

「それでフミアキ様、旅ではどちら迄足を運ばれたのですか？」

「おおう、久々の感覚。そして何時の間にか注がれてる。紅茶言わずもがな、サイレント・ティーである」

「変な固有名詞はお止めください」

「前のパターンと全く一緒ですね。…それで旅ですか、別に私が言わなくても、コリーさんから聞いてないんですか？」

「旅の話と言うモノは本人の口から聞くのが醍醐味です。あの子の話は“報告”ですから」

「それは、味気ない話ですね。よろしい、私がこの旅で体験した話を語りましょう。あれは……」

フミアキが旅を語り、夏の日晴れた午後、クーは嬉しそうに話に聞き入り、アイリは変わらず無表情で紅茶を継ぎ足していた。

「…先生、気を失いすぎじゃない？」

話終わりも、もちろんコリーに気絶させられ気が付けば館だった。その事でクーには呆れられた。呆れられながらも心配してこちらを、覗くのでフミアキは何でもないと、言う様に返す。

「それだけ周りの突っ込みがきついただけですよ。まあ、体力がないのは自覚してますがね。少し運動でもするか」

「なら散歩などは如何ですか。少しずつ歩いて体力を付けるのも宜

しいかと存じます」

「なんだかさ、病人の予後生活みたいだね。うふふッ」

「言ってなさい、君も30過ぎたらこんなになるんですよ」

「えー、そんな訳ないよ。これでも身体はよく動かしてるし先生よりも強いんだよ！」

「そんなひよろい腕で言われても…、普段私がご飯を食べてないみたいに言いますけど、君も大概じゃないですか」

「ひゃあ！いきなりへ、変なところ触らないですよ！」

「うーむ、ぺたぺたすべすべ、これが15才の肌か…羨ましいですね。こちとら二の腕の弛みが…肌のクオリティ下がりまくりですよ」

「あ、あんまり触らないですよ…それともう16だからね」

プンスカと言う音が聞こえそうな感じで、クーがちょっと怒った様にフミアキに掴まれた腕を振り払う。

「そう言えば、誕生会は何時でしたかね？」

「言っただけでなかった？明日だよ」

「へえ、確か第二王女様も明日でしたね。ん？あれ第二王女様もク  
ーと同じ年で16でしたか？」

「あ、あれー。偶然一緒だね。うん、偶然に一緒だったよ。そうそ  
う、明日の準備もあるし帰らないと…」

何故か慌てた様に両手をバタバタ振って居るクーに、フミアキが  
思い出したように「ちよつと待って下さい」と言っで、旅で使った  
ずた袋を漁り始めた。「あつたあつた」とフミアキが小さな白い袋  
をクーに手渡す。

「これを渡しておきますよ」

「何これ？」

「ええつと、普段からお世話になってますからね。感謝の気持ち  
と、お祝いのちよつとしたモノです」

「なるほど、ソレを作り態々岩窟族の村に行っていたんですね」

「そうだったんだ…、ねえ先生開けてもいいかな？」

「君の為に造ったんですから、どうぞ開けて見てください。ああ、でも、素人の造ったモノですからね。気に入らなかつたらすいませんです」

「先生が自分の手で作ってくれたんでしょ？それだけで嬉しいよ。何があるんだろう…」

うわぁ！うわぁ！と、クーが歓声を上げる。クーの手に乗っているのは小さなアミュレットにチェーンを足してネックレスにした格好で、銀細工のクロスが二重の輪環を背負った構図になっている。

中央にはカットされた紅い宝石に、フミアキが方陣を刻み籠んだ例の石が鎮座していた。

「すっごいよコレー！見た事ない銀細工だね、え？あれ…これって」

「なんだ、もうバレてしまいましたか」

もう少し気が付かないかと思いましたよ。と、苦笑しながら  
フミアキがニヤける。

クーのイーバークリーの瞳がより一層の歡喜の色を濃くする。

「わ、分かるよー！だってコレ、勇者ボルドーの守護宝石でしょ？  
！」

「当たりです。挿絵で一枚だけしか登場しなかったのによく覚えて  
ますね」

「先生の本は隅々までじっくり見てるんだからね！やったー！これ、  
勇者ボルドーとお揃いだよ！」

「絵は白黒で分からないと思いますが、真ん中の石の色だけは違っ  
たんですけど、後は大体同じになる様に造れたと思いますよ」

「そうなんだ。でも何で色を変えたの？」

「うーん、クーですから白とか透明色でもよかったですよ、何故  
か紅色が一番しっくりする。そう感じたんですよ、でもやっぱり、  
色が気に入りませんでしたか？あんまりこう言うのは詳しくなくて、  
流行と言うのもよく分からないですし……」

「そうなんだあ…ううん！全然そんな事ないよ！ありがとうね、先生！大事にします！」

本当に嬉しいと言う事を身体一杯に表現してくれるクーに、フミアキもまんざらでも無い様に微笑む。

「フミアキ様、折角ですからクーエンフルダ様に、首飾りを直接付けて差し上げては如何でしょうか？」

「ふえ?! いいよ、態々悪いよ…」

「クーだって自分で付けられるでしょう? 何でしたらアイリさんが付けてあげればいいんじゃないんですか？」

「はあ…。とはアイリ、クーは「うう…」などと呻いている。あれ? 私何かしましたか?」フミアキは首を傾げるだけだった。

そんな和やかな空気の中、コリーだけは扉の外で入るタイミングを完全に失って頭を抱えていたのは、アイリだけが知っていた。

10話 帰還で首飾り（後書き）

読んで頂き有難う御座います。

ご意見感想ありましたら宜しくお願ひします。

実は話が収まり切らなかつたので

残りは次話に回します。いろいろ悩みますね。

12/18 改稿

## 11話 帰還で陣（前書き）

たった方陣の説明で終わってしまった話。

口々に設定詰めてなかったなので、過去最高の駄話に…

最初に謝ります、ごめんなさい。

12/16 本文の修正。魔法の言葉は『どうしてこうなった』

## 11話 帰還で陣

「やっと落ち着いたと思ったら、なんだか外が騒がしいですね」

フミアキが窓の外を見やると、無数の灯りと方陣の燐光があちらこちらで揺れ動いていた。

王都と言えど、闇は深く世界を覆っている。住人達は各々の光を持ち寄り、夜の中作業に励んでいる様だった。

「明日は国民が待ち望んだ、第二王女様の誕生祭です。あの御方は民に気安く一番身近な王族と言えましょう。まして成人の祝祭、自然と力が入ると言うモノです」

「16が成人でしたか、まあ、私には関係ありませんね。ですが、そんなに第二王女とやは好かれているんですか」

「……とやは？フミアキ様、不敬罪に取られかねないお言葉です、ご注意を。それに、第二王女様は古き時代より連綿と続く、王家の血を色濃く受け継がれた御方です。血統のみならず方陣の御力に至っては、中興の祖とも名高い慈悲王に勝るとも劣らぬとの評判です。それ程尊き存在でありながら、気取らぬ振る舞いで民草に接する御姿は、輝かしくも貴き……こほん」

フミアキの言葉を諫め、如何に第二王女が素晴らしい存在なのか

を、朗々と語り始めたアイリだが、フミアキの呆気に取られた顔にその口を噤くんだ。

嫌な沈黙が固まる前に、フミアキが話の端を拾い先を続ける。

「失礼しました、話の腰を折ってしまいましたね。中興ちゆうけいの祖と言えば“ゴードベールド”王でしたか。何代か前の名君として有名だったと記憶してますが、はははは、アイリさんは第二王女様に随分とお熱みたいですね」

「……本来の徒人族と言う呼び名は、王族に従う人族を指す呼称であり、それが何時しか一般的な人族全体の呼称へと独り立ちして」

フミアキの前で、我を忘れて熱く語ってしまった。ばつが悪くおまけに茶化されたセイか何時も以上に声が堅くなる。

自身の失態を隠すかの様にアイリは、常識的な、いつそ辞書にそのまま乗っっていそうな理由を並べる。

「その経緯は興味深い話ですね。それならアイリさんが、王族に敬意を払うのも別段悪い事ではないのでしょうか？アイリさんにそこまですわせる第二王女様は大した人物なのですね。ふむ……、私の様な者が逆におかしと思えますよ」

そのフオローは実に変だった。

そもそも、アイリにとつて辞書に乗っている様な一般的な理由で王族を敬っている訳ではない。

彼女の極個人的な話であり、一般的な徒人族の状況とはその理由を違<sup>たが</sup>えている訳だが、フミアキには知る由もない。

「自覚がお有りな様ですが、治す気はさらさら無い。そう言った事ですか」

あはははは。と、乾いた笑いで逃げるフミアキが話題の転換を図る。

「しかしクーも大変ですね、第二王女様と誕生日が一緒とは。やっぱり明日は第二王女様の誕生会に参列してから、自分の誕生会なんでしょうかね。貴族の位なら王族の催しに出ない訳にはいかないでしょうし、体裁が必要な身分の人は本当に大変ですね。世の柵<sup>しがらみ</sup>って奴ですか」

「クーエンフルダ様が手を掛けて下さるからこそ、今の生活が立つわけではありませんか」

脳<sup>のう</sup>天<sup>てん</sup>気<sup>き</sup>に話すフミアキに釘を刺す。  
実際の所、教導院の件はクーの柵<sup>しがらみ</sup>を用いて救い出された“側面”がある為だ。

「そう言えば、今の王様は子供が二人とも女性でしたよね。なら、明日は権謀術数のどろどろの王宮内で、王女様方の心を射止める為

にすごい事になっているかも。そんな精神衛生の悪い環境だと、クーの性格は癒やし効果でもって、王女様方に気に入られたりすると思いませんか？」

「……………」

「あー、でも、天真爛漫で純粋なクーには、厳しい戦いになりそうですね。クーの事ですから、他人を出し抜き蹴落としなんて事出来そうにないですよ、これは心配になってしまふ。こっそり応援に行きますか？」

「……………ふう」

多分に呆れが含まれた溜息がアイリから零れる。無表情なその顔には「ダメだこいつは」と言う言葉が珍しくも、ハッキリ浮かんでいるのが見て取れた。

しかし、当のフミアキにしては、ダメだこいつはと読み取れるけれども、今の会話の流れの一体何処に呆れられる要素があったのか、釈然としない面持ちで首を捻っていた。

再び会話が途切れ、暫し沈黙する二人。

部屋から音が消えると、自然外のざわめきが微かに聞こえて来るだけ。

会話の終わりを察したか、アイリが一つお辞儀をして足を下げようとした時、フミアキから言葉が掛けられる。

「ちょっと待って下さい、アイリさんにもお土産があるんです」

「旅の、ですか。ですが、私には頂く理由はありません」

「こちらには理由がありますよ。あー、結構奥に入り込んでるな。んーこれこれ」

そう言っただけで旅のずた袋を漁り、目的の物を取り出す。

椅子から立ち上がり、アイリに今取り出した長方形の小箱を手渡す。

「フミアキ様の理由ですか？それとこれは」

「まあ、まずは開けてみてください。きっとアイリさんのお役に立ちますよ」

訝<sup>いぶか</sup>しむも、取り敢えず渡された小箱を開けて中を確認する。

アイリの反応を楽しむ様な顔に、警戒心が首を擡<sup>もた</sup>げる。

「これは、眼鏡……気付かれましたか。ですが申し訳ありません、私の目は治療方陣でも治らなかつた程です。症状も眼鏡でどう

にか成る様なモノでもありませんでした」

「そこはクーに聞いたので、大体の症状は把握してます。何、モノは遣り方次第って事ですよ。それとも、もういいんですか？」

「ありとあらゆる治療を試した結果が今なのです。もう既に終わっているのです」

「もう一度聞きます、本当にいいのですか？」

ギリツ、と、アイリの奥歯が軋む。

この男は一体何を言いたいのか、アイリは熱くなってしまふ。

アイリの目がおかしくなってから、彼女の世界は一変したのだ。

そんなデリケートな部分に、フミアキは無遠慮に入り込んで来る。

大人びた女性と、アイリの無表情は周りから称されるが、アイリ自身クーよりも僅かに年上なだけで、その精神は未だ成熟には程遠い。

その証拠に、この館に来た当初より、自身の感情を持て余していた。

それは納得したハズの以前の職場より離れた事、離れたくなかった。職場と言うより、己の主の傍りだけだ。

自らの目の異常を理由に、守りたい者から遠ざかったアイリは、苦しかった。悔しかった。メイドの真似事など、アイリの矜持が許さないのだが、それでも間接的にでも主と仰ぐ人と繋がっていられ

るのならば、渦巻く思いに蓋をした。

だが心の奥底に沈めた思いは、主に対する思いは押し留める事も出来ず、短い時間の内に濁ってしまった。

澱んだ思いは強いストレスとなり、アイリの感情を乱す。

そんなアイリにとって、フミアキは格好の的だった。

何せ、フミアキが起こした教導院の騒ぎの際、彼女の主はフミアキの為に随分と労力を掛けたのだ。

それだけでも許し難いのに、フミアキは彼女の主を涙顔にさせた。それ以上にアイリには二人の掛け合いが眩しくて、見ていられなかった。お互いが信頼し合う様に、楽しげに遣り取りする。

もしかしたら自分はこれから先、気安く主に近づけないかもしれない。離れるとはそう言う事。

今のアイリは、逆に主に気を遣わせてしまっている。目の事、この任務とて、アイリを休ませる意味だと言う事は分かっていたからだからだろうか、気が付いたらアイリの手は動いていた。溜め込み、濁り、溢れ出したその感情は、またたく間にフミアキを氷像にすると言つ結果を生み出した。

その行動が主の怒りを買う事も目に見える事であり、その上で自分の命を失っても、主に対する利益があり、自棄もあつたから。

殺してしまつてもよかつた。教導院と主の関係は良好だったのに、フミアキがギクシャクした空気を作り出した切欠だからと、本当は止める事が出来た手に、大儀はあつたと自分に言い訳をした。

暗い思いで創りあげた氷を、フミアキが「いいかな」と、どんな理由で身動きせずを受け入れてくれたのか分からないけれど、何故かほんの少しだけ、極少し、嬉しかった。

自分自身すら“否定”しかけていた所に、フミアキは“肯定”し

てくれた様に見えたから。

正直助かるとは思わなかったのも驚きだった。

確かに手応えは感じた、それだけの過剰な位の力で創りあげた氷だったから。それが簡単に砕けた。

おかしく思い注意深く観察し始める、生きていると確信出来た。それよりも治癒方陣の力が強すぎて、このままでは不味い事になってしまうと、流石に主の手を汚す訳にはいかず、フミアキを蘇生させる。

最もらしい理由を探すのに苦労したが、何せアイリとて謎だった為に若干の誤魔化しを入れた。

もしかしたら、無意識の内に加減を加えたのかもしれないと考える。直前に感じた、救われる様な錯覚でもって手が緩んだのかも知れない。

謎も真実も、アイリには解らなかった事から、そんな考えに帰結きけつした。

フミアキは、アイリを咎める事もなく、何事も無かったかの様に接して来る事に、戸惑いと小さな納得を受ける。

やはり受け入れてくれたのだろうか。

その後も、今度は死なぬ様に手加減を加えて追い詰めるも、やはりフミアキの態度は変わらなかった。そうやってフミアキが受け入れてくれる度に、心の折り合いがついていく気がした。

だからだろうか、またあの澱んだ思いを組み上げてほしくはなかった。諦めた思いだから。

口に出す事で自分を納得させる。時間は掛かるだろうが、切欠は出来たのだからとフミアキを見つめる。

「……はい、未練は既に断っております」

「強情ですね、ならば諦める事も諦めて下さい。その目の症状は治りますよ、ただ、今のままだと時間がかかってしまつと言っただけです」

「何を根拠にその様な事を」

「根拠も何も、方陣を使えばいいだけじゃないですか。それでも軽く4・5年は掛かりそうですよね」

「ですから、治療方陣では治療し得なかったと申しています。治療方陣の特性するらご理解してらっしゃらないのですか」

「えー、徒人族の方陣の特性は、全部とまではいきませんが理解しているつもりですよ？」

「ならばっ、治療方陣はこの目の様な身体の奥の、所謂内通には効

果が薄いと…」

「だから、方陣を使いさえすれば、身体の奥の治療とて遣り用もあると…」

お互いに顔を突き付けて言を飛ばし合う。理解していないのはそっちの方では？と言う風に見つめ合う。

片や顔は変わらず雰囲気で、片や困り顔を表にして。

「……」

「……」

「治療方陣ではっ」

「方陣では」

お互いに一番の主題を改めて口に乘せる。  
ここにフミアキから、待ったがかかる。

「ちょっと待って下さいね。何か決定的な論点がずれている気がするんですけど」

「それは…、私も少々感じる所があります」

フミアキが大きく深呼吸し、前後の会話を整理する。

「方陣：方陣…、方陣とは、不思議パワー（謎）である！以上」

「違います。あまりお巫山戯が過ぎると、その口『氷』で縫い付けてから開かせます」

「なんて酷い…、そんな事すれば唇の中身が出てしまうではありませんか…」

「何ですか唇の中身とは…、昔、三種族に伝わりし、陣と『力ある紋言』その二つを用いる事で、あらゆる現象を引き起こすモノを『方陣』。未熟な者は地に陣を起こし地陣とす、空に陣を描く者は成熟とし空陣を持って方陣師と称す。徒人族こそ最も優れた円の陣を持つ、故に『円環陣』と呼ぶ」

フミアキのあまりの説明に、アイリが軽く目眩を覚える。実に当たり障りのない一般常識でフミアキに答える。

「お見事です、パチパチパチ」

「……」

アイリに思いっきり睨まれる、それはもう氷の様に冷たい。

「えー…つと、面白いですよ、徒人族が円を基本とした陣を使うとして、他の種族の方は違う形の陣を使ってるんですから。巖窟族は、四角い陣で『四方陣』と言うし、長耳族は、三角形の陣で『三面陣』。こんがらがらから方陣で統一してほしいですよね」

「総称として方陣と呼ばれる事はあります。陣を描き紋言を口に現象を引き起こす、そこまでは三種族同じです。ただ、種族で方陣の特性に違いがある為でしょう。徒人族は円環陣を、巖窟族は四方陣を、長耳族は三面陣、それぞれが己の種族以外の陣を使えません。使えない以上、区分けは必要でしょう」

「確か特性と言うのが、徒人族の円は治癒と言う現象に特化し、巖窟族の四角は守りに、長耳族の三角は火や水、風や土と言った自然の力を操る事に長けてるんでしたね。陣の形に意味があるのか、それとも、使用する種族自体に特性があるのか：実に興味深いですね。そもそも、この配置はバランスがいいのですよね、アタッカー、ディフェンダー、ヒーラーと、この構成ならラストダンジョンでも攻略しやすいでしょう。難を言えば中衛枠と色物枠が居ないって事ですよね」

「何を言ってるのかさっぱり分かりません。それよりも、話がずれていませんか？」

はて？と、言った顔のフミアキに、話の筋を戻すべくアイリがもう一度問いかける。

「治療方陣を使えば、この異常を治す事が可能と。ですが時間がかかるとは？」

「うー…ん」

思案顔でアイリをじつと見る。治療方陣と方陣 この場合は円環陣だが、その二つの特性と言うモノをアイリが理解していないハズがないと思っただが、まだもう一つお互いの意識を擦り合わせる必要があったみたいだ。

「アイリさん、治療方陣って外傷は完璧と言っていい程効果を発揮するけれど、内痛、所謂ところの身体の中の皮膚の下、目に見えない部分の治療には効果が弱い、これで合ってますかね？」

「はい、外傷なれば切り傷、刺し傷、火傷と言った事には傷跡すら残しはしません。ただ…、打撲や捻挫、骨折に至っては基本、自然

に治るのを待つばかりです」

「中の痛みには効かないのは辛いですね、その痛い間は何もしないで待つだけですか？」

「そうですね…、昔から伝わるこてあそ小手遊びと呼ばれるモノがありました、手の平くらいの陣を繰り返して描くと言った遊びの様なモノなのですが、単純な動作を繰り返していると、幾分か痛みが和らぐ事があります。おそらく、陣を描く事に意識がいつて痛みを自覚しない様にする、と言った意味だと思われませんが」

「あー、そういう事ですか、そうきたか…、まあ間違いないんだろうけど、ああ、でもな…」

腑に落ちた。そんな言葉に続く齒に物が挟まった様な喋りに、ア  
イリが無言で促す。

「そうですね、陣を描く時に、こつ、すいーつと身体に流れる“ナ  
ニ”を感じませんか？」

「初心の時に教わる、力の流れと言つモノですか？力の流れる違和  
をなくす事で、次の段階に進む事が出来ます。その違和が抜けぬ内  
は初心者と言つてもいいでしょう」

「私が言いたいのは、その初めの頃に意識する力が、その目を治す可能性を持っていると」

アイリに取っては、初心者の証となる現象であるから、そんなモノに価値などない。

それが方陣を扱う者、方陣師にとっては当たり前の事であったからである。

当たり前であるからその現象には名称と呼べるモノがなかった、ただ力の流れと…一時知るだけで終わるそのままの呼び名があるだけ。

訳が分からないと言うアイリにフミアキが続ける。

「アイリさんがその初心者から卒業して、その後の訓練が事故かで足が動かなくなる位の捻挫を負ってしまったとしましょう。その時足の痛みと言うのは何日で治りますか？」

「捻挫ですか、大体の所半日も放って置けば問題ないですね。最初の頃の訓練は、よく怪我をしたモノですが、外の傷なら治療方陣を頂けますし、捻挫や打撲と言った時にはこてあそ小手遊びで以て、陣を正確に描ける様に訓練していると指導されます。そう言うのは初めの頃、綺麗な円が創れずなかなか難しいものでして、訓練としつつ痛みを紛らわせる事にもなります」

「怪我の治りってそのくらいの速さが、普通だと思えますか？」

「ええ、大抵の事でしたら放っておけば治りますので、治療方陣も外傷のみに特化した形なのではないのでしょうか。この目の様な特殊な状況は少ないと思います」

「初心者マークって扱いだから随分軽く考えられてるんだなあ…、これってすごい事なのに…作り上げた価値観の問題か。アイリさん、一般的に半日で治るって言うのは驚異的な回復力って言うんですよ。他の四方陣しっぽうでも、三面陣でも、そんな特性は無いんですよ。多分ですが、周りに同じ方陣師ばかりの環境だったと思いますが、比べる事がないので気付かなかったと思います。もっと…そう子供の頃の怪我は何日も掛けて治していたのではないですか？」

そう思えばと、フミアキに指摘されて初めて思い当たる。

方陣の基礎を習い、初心者を駆け出した頃は、訓練で負った傷は大抵が治療方陣で治し、未熟な内は訓練と称しこてあそ小手遊びを、暇があれば繰り返し練習していた気がする。

方陣を覚える、そのずっと以前の話…。

怖気おそけすら催す。

オモイダシテハイケナイ、セツカク、ボウキヤクノ、フチ、ニ。

「あの、アイリさん？」

「……っ」

フミアキに話かけられ、漸く意識が表に浮き上がった。心配げにこちらを見てくる。

何の話をしていたのだったか、瞬きをする。そう、答えなくては、今を考えていればいいのだと自分に言い聞かせる。

「そうですね、その通りだと思います」

「はあ……、具合が悪かったのですしたらもう終わりにしますか？」

この言葉に苛立つ、こちらを気遣ってくれているのは理解出来てしまつが、この目の前の男が先程からアイリの気持ちを上に下にと乱すのだから。

「いえ、結構です。私としても興味深いお話ですので……、ええつと……、そう、初心の頃に習った事が、治癒としての現象を伴う行為との事でしたか」

まだ上手く立ち直りきれていないアイリの様子を気遣いながら、フミアキが促された持論を続ける。

「……そうですね。私の考えとしましては、円環陣の初心の時の力の流れですか、折角ですので『初陣』としましょうか。この円環陣

の初陣の特徴は、二つ。一つ、円環陣を描く時に身体を一瞬通る。二つ、その力は治癒方陣の手の届かない身体の中の痛みを癒す。と、こう推測されます」

「その推測ですと、この目は…仮に、ですが、初陣で以て自然治癒を期待し治る可能性があると言うのは分かりました。しかし、その話本当なのですか？私は、目に異常を負ってから円環陣は使っておりません。本当にこの目は、治ると仰るのですか？」

「あー、私がよく『氷』漬けにされてましたね。私としては、これ程の“異質”な力の違和感を無くす、と言った事の方が難しいんですがね。その違和感を追求していったら判別した特性でして、初陣の利点は先程の二点、それ以上に欠点と言いますか、身体を一瞬通ると言うだけあって効率が良くない、局所的に作用しない事。4・5年掛かるであろうとは、あくまで私の体感で出した数字ですので、絶対とは言えないのですが。何せ初陣の力は一瞬で身体を通過するだけですからね。そこでその眼鏡になる訳なんですよ」

「これ、ですか」

アイリの手の中に収まっているが、今の今まで眼鏡の存在を忘れていた。

それと言うのも、軽いのだ。アイリの知っている眼鏡は分厚く、重く、老人の為の道具と言うのに、この眼鏡は薄く、軽く、縁すらない、直接レンズの部分にツルが差し込まれている。

フミアキと言う男が作ったのだと納得出来る、おかしな代物だっ

た。

「まあまあ、百聞は一見に然ず。まずは使ってみて下さいよ」

あまりに喜々とした声で進めるフミアキに若干の不安を残しつつも、言われた通りに掛けてみる。

「軽い…ですね、これでは眼鏡としての体を成さないではありませんか？」

「それはアイリさん専用として造りましたからね。それと確認になりますが、私がクーから聞いたのは、外部から頭部への衝撃を受けて、目の異常が確認された。それ以前までは正常に見えていたが、頭部に怪我を負ってからモヤの様なモノが視界を邪魔する、あくまで視力が落ちた訳ではない。ああ、これはですね、先程言い忘れてましたが、先天性の異常や脳の疾患にも、初陣の力は効果ないかもしれないと予想出来ましてね。目の事、間違いありませんか？」

「仰る通りです。以前の任務にて戦闘中強い打撃を頭に貰ってしまいました、御陰でこの様な有様になってしまいました」

ギリツと、歯が軋む音が聞こえる。余程その当時の出来事が憎かったのだらう、それでも表情を変えずに、けれど纏う雰囲気や堅いモノへと変えている。

正に怖い一言に尽きる。

「抑えて抑えて、ほーらリラ〜ックス」

「襲撃者には相応の傷を与えたので痛み分けとなりましたが、あの怪しげな隠形術を破れず…この様な場末に身を襲<sup>やっ</sup>す羽目になりました」

「まあ、間違つてはいないんでしょうが、何故か腑に落ちない。と言うか私が腰抜かしそうですので、その怖い仕舞ってくれませんかね…」

とつとつ  
訥々と話しているにも関わらず、アイリの身体から放たれる殺気が部屋に充満する。

なんとか緩和させようと変な方向に努力するも、敢無く不発に終わった様だ。

フミアキでなくとも、正直倒れかねない程の強さであった為に堪らない。

「アイリさんは運がよかったですね」

フミアキの慰めを受けて、アイリが無表情でこちらを見る。

雰囲気<sup>きふき</sup>が視覚化出来れば「何が良かった？そうか死にたいのか」と判別出来るかもしれない。

「あああ、いや、そのですよ！偶々、徒人族の円環陣の特性が治癒と言う現象に特化していたから、初陣なんて言う特性が備わっていたんでしよう！他の種族の方陣でしたら、今の症状を何とかするなんて事きつと出来ませんでしたよ！それに異常を負った目だっても、身体の奥とは言え露出している器官ですから！これがですね、脳に障りが出たとか！半身不随とかだと、治すのにすごい手間がかかると言いますか、もしかしたら治せないかもって言う事もありそうです！そう、その点、目と言う器官ですと、その部位と初陣の特性を利用した光具で以て、今回なんとかなるかなーと、思い至った次第で御座います！はい！」

「まだ全てを信用した訳ではありません。ですが、話の筋に嘘がある様にも思えません。もし、仮に、この目が以前の通りに治るのであれば、もう一度主の側で剣を振るえるのならば…。何も望みは致しません」

「セフセフ…、あ、いえこちらの事です。一応その眼鏡は光具ですので、形ある紋言で発動します。『デフォルトモード』と言ってくれればスタンバイモードに入ります」

「……分かりました。『でふおるともーど』」

眼鏡が一瞬淡く光を放つ。ピタリとアイリの肌に吸い付く感覚を味わう。

「何ですか、これはっ」

思わず声が出てしまった。

ピタリと肌に固定されたかの様な眼鏡から、奇妙な未知の感覚に  
急ぎ眼鏡を外そうと試みるも取れない。

「そうそう、それで装着された事になりますので、逆立ちしてもズ  
れないんですよ。ふっふっふ、これが中々苦労したんですから、ド  
ヤ顔になるうと言っモノです。その状態がスタンバイモードになっ  
ているので効果はオートと素晴らしい！何でもいいので方陣を描い  
てみて下さい。子手遊こてあそびって奴ですか。え？何か、何時も見てる方  
陣ですけど、何でそれを私に向けるんですか？あれ？」

フミアキに促されるまま使い慣れた円環陣を空に描く。  
標的はモチロン、フミアキである、決して癢に触ったとかではな  
い。

何でもいいと言っしたのはフミアキだから。

「……クッ」

アイリの描いた空陣が発動する直前、方陣を習い初めの頃に体験  
し、もはや忘れてしまった感覚が、甦り身体の中を走るのを感じる。  
のみならず、一点だけ違う現象がアイリを襲う。

方陣を描いた指先から通る初陣の力が、首の部分に差し掛かった時消える。

消えた初陣が、今度は目に直接入り込むと言った、これまた未知の感覚を味わう。

戸惑うアイリが頭を軽く振る。

思わず閉じてしまった目を恐る恐る開けて、フミアキにどう言う事かと問い詰めてやろうと意思を固くしたアイリを、更なる現実で以て混乱の域まで達した。

「こ、これは一体…？」

見開いた先に広がるは、あの襲撃時以前の視界。自分の“何時も通り”の世界であった。

絶望を齎し、アイリを、自分の人生を狂わした目の異常が、綺麗に無くなっていった。

感動するべき場面なのだけれど、こころもあっさり目目が綺麗に見える様になると、実に複雑な気持ち湧き上がってくる。

それがフミアキの力で叶った願い、と言う事も多分に含まれるかもしれない。

「自信のある出来の光具でしたが、どうですか。あれ、反応ありませんね、アイリさん、大丈夫ですか？問題なく作動した様に見えたんだけどな…」

「ええ…問題なく…、見えます。以前と同じ位に、いえそれ以上に綺麗に…。これが光具？確かにコリーの報告にはその様に…いや、

だが…これだけの現象を…、発想に実現性が余りにも…、光具の定義が」

今の混乱は、現在の光具とは一線を画すフミアキの光具の発想、出発地点。光具と言うべき道具は使用者が方陣の力を注ぎ、予め刻み籠めた道具としての方陣を発動させる事にある。

その、絶対的前提条件を無視した事になる。

初陣の力を利用したにせよ、意識して注ぐ力ではない不確かな力を操り、望む事柄を実現させる。

アイリの知るとの光具を見ても、このような現象を引き起こす物はない。異質な力。

光具は確かに、生活に、そして戦闘に、あらゆる場面にて持ち出されるが、フミアキの造り出したこの光具は余りにも、一般的な光具と呼ばれる物と掛け離れていた。

「今までハッキリと見えなかった分、よりキレイに見えるんですけどね。ささーっと説明しますと、使用者が創り出した方陣に、徒人族の円環陣から発生する初陣の力を、その光具がオートで吸い取り一点に集めた後に、直接患部に照射すると。アイリさんの目の症状が、角膜が水晶体のダメージだと思われる為、どちらが悪いか判断が着かなかつたから、纏めて癒してしまえつと言う事を実現してみました。初陣って結構融通が効く力と言うか、今までが身体全体を万遍なく一巡するって所に、指向性を与えてやると指示通りの動きをしてくれるんですよ。と、その光具の効果が持続している内は、クリアに見えますが、あくまで目の症状を初陣で整えているだけです。当然外せば以前の状態に戻ります。ですが、定期的に初陣の力を光具に流し使い続けていれば、初陣の効果で以て半年くらいで、うーん、もしかしたら時期は前後するかもしれませんが、これ

ばっかりは私も結果を見てみないと分からないんですよ。安心して下さい、必ず完治しますよ」

アイリは絶賛混乱中だった。

目の異常を抱えてからの自分の人生の激変、流れ着いた先は意に沿わぬ男の世話。

様々な思いを渦中に、漸く整理の付きかけた気持ちを、こつも容易くひっくり返したのだ。

必ず完治するとまで言い切ったのだ。

フミアキは苦勞した、などと言ってはいるが、アイリからすれば一生物だと思っていた症状を、短期間で解決してしまったのだから一塩だ。

その説明にしても、アイリの耳に馴染まない言葉が幾つも出てきて、理解しようとしてもしきれない。

「申し訳ありません、もう一度…」

「それと、ここでのメイドさんも終了ですね」

アイリの言葉を遮り、フミアキが言い切る。

その顔は何時も通りの、草臥れた三十路過ぎの男の愛想笑いだった。

「行き成り何を仰っているのですか…」

混乱が収まらない内に、畳み掛ける様にアイリに放たれた解雇宣言。

ここまで混乱させられた事は、アイリの人生に置いても無いだろう。

「何をつて、それを掛けていれば目は見える。アイリさんはクーの側に居る事を望んで、その光具を手を取ったのでしよう？先程半年と言いましたが、途中経過を見るくらいなら、ここに居る必要もありませんよね」

「……それは、そう…ですが」

「それともここが、いや、私が気に入ってくれて離れたくない。と、言う事ですか。そうですか、いやー、参っちゃいますね。こんな若い子に好意を寄せられるなんて、私もまだまだ捨てたモノではないんですね。婚約のなんでしたっけ“連環の契”でも宣誓しましょうか」

“連環の契”とは言わば結婚の言質であり、神聖な言葉。年頃の女性に向けて、不用意に口にしてはとても不味い単語。

フミアキの巫山戯た態度に、アイリの指が動く、描く、発動する。先程までの「完治する」と真摯な声で断言したソレと、とても同じ声とは思えない軽い言動にアイリの色々な感情が爆発したとも言える。

それは何時もの遣り取りと寸分も違わずに、フミアキを氷の彫刻

へと変える。

「今までお世話になりました。本日この時間を持ちまして、お暇を取らせて頂きます。フミアキ様にはご壮健でお過ごし下さい」

優雅にメイド服の裾を広げて、作法に習った綺麗な一礼を披露して退室するアイリ。

アイリの去った後には氷の彫像が鎮座する。

不意にフミアキの胸元から光が漏れる。それは方陣の発動時に舞う燐光に似た光。

音も立てずにフミアキを覆う氷が割れる。砕け、散らばる氷が床を濡らすよりも早く、フミアキの胸元の光を帯びた一点に吸収された。

「やれやれ、これで一件落着かな。若い人の相手は疲れるわ、意固地になつてる相手は尚更ね。あー、背骨がぼきぼき鳴るわこれ」

まるで何事も無かつたかの様に、独り言を零す。

「そう言えば、私の理由を話してませんでしたね、アイリさん“帰れる場所”があるのなら、帰るべきなんですよ。意地張っても口クな事にはなりません、これ年長者としての言葉です。帰る場所、元の鞘、それらは、ずっとずっと大切に、“本当の幸い”って奴なんで

すから」

言葉を紡ぐも、誰一人として聞く人間などいやしない。

主人を一途に想う小鳥は巢に帰る事を選んだ。その背中を押し、翼を与えた男は何処に帰るのか。

闇は深く、夜より尚色深い感情で以て零れた男の言葉は、拾われる事なく消えた。

外からは相変わらず、騒々しくも活気に満ちた喧騒が、暗い館の一室まで届くだけだった。

## 11話 帰還で陣（後書き）

お読みただいて本当に本当に有難う御座います。

この話書くだけで、ほぼ一週間潰しました。

自分の納得する物を書くってむづかしいんですね。

12/16追記、設定をちよいと弄りました。

アイリの心象を付けたし。

めちやくちや文字数増えたって事は、それだけ説明が省かれていた  
と言う事で反省の頻りです。

辻褄が合わないのでは？矛盾している。意味が分からん等々あると  
思いますので、宜しければご指摘頂けると有難いです。

## 12話 新しいで合い(前書き)

新章突入で御座います。内容は相変わらずですがご容赦下さい。

## 12話 新しいでかい

時刻は夜、一人で使うには広すぎる部屋の中、少女は座る事なく時間を過ごしていた。下のホールでは賑わいが声となり部屋まで届く。

「なあアイリーン、座ってもいいだろうか……どうも気が落ち着かない」

「我慢下さい、折角整えた装いに皺が寄ってしまいます。まずは御集まり頂いた衆目にその御姿を披露する事、座るのは後でお願いします」

やんわりと少女の提案を下げる、アイリーンも意地悪で言っている訳ではない。

今宵はこの少女が主役の夜会があり、装いには何時も以上に気合が入ってる事が服装から伺えた。

なにせ、少女は華やかな催しを苦手としており、滅多に夜会には出ない事は周知であり、今夜は少女の誕生祭と銘打たれた日、彼女以上に周りが騒がしかった。

そんな数少ない少女主役の席を一番燃えていたのは、主と仰ぐアイリーンだった。

朱銀の姫を最高の状態で送り出す。彼女の使命はその一瞬に今や収斂されていた。

そう思つのも当然であろう、銀の波は肩甲骨まで流れ、櫛を挿せば櫛自身が自重でもって地に賦すであろう流銀、本日の装いを引き受けた者の葛藤は、結わえる事すら許さぬ程の流麗な髪だったのだ。朱色の瞳は、見た者の心を奪う魔性の果実の様、幼い顔立ちと相まって相手は倒錯に溺れてしまつかもしれない。

天然の極上物の宝石を十五年もの時間を掛けて、丁寧に丁寧に、微に入り細に入り磨きあげた存在が、今宵は余すところ無くも着飾っているのだ。

足の先から手の爪先まで、本人を無視して隅々まで磨き上げられ、一流の仕事が文字通り光る様な光沢の純白のドレスを身に纏う。

仕事人に取って、この珠玉に手を掛けられる事は喜び以上に無く、また余計な物を付ける事により、紅玉がくすんでしまわぬか、仕上には気が気ではなかった事がよく見受けられる。

「にしてもだ、この衣装私には似合わないと思うのだが。いや、職人達を貶すのではなくきつと他人から見たら、服に着させられていると笑われるんじゃないか？」

「何を仰いますか、針子達も褒めていたではありませんか。実に彼女達は良い仕事をしてくれました。そも今日は主役と言う事を御忘れですか？これ以上に無いと言うくらいに輝いておられます」

少女が気にした様に眩くも、アイリーンに取っては杞憂の他ない。しかしながら憂いが消えない、だが詮無い事かもしれない。それは少女の三つ上の姉が余りにもずば抜けているからだ。

昔から姉妹は周りから比べられ、太陽の様なと賞賛され幼い頃から王者としての風格を身に纏い女性でありながらも次代の王として周囲を認めさせる程の傑物。

姉に対して、物静かで引っ込み思案だった少女は劣等感がバリバリに育ってしまった。

何年も掛けて固められた心は、元々の性格もあつてか、幾重にも少女を縛り上げる。

「う、うん、けどな、けどな、その……この衣装は、少々やり過ぎではないか？」

今この場所には、アイリーンと少女しか居ない。にも関わらず、少女は胸元を恥ずかしそうに隠す所作を繰り返す。

簡単に言えば、空いてるのだ、それはもう見せつける様に鎖骨を出している。

健康的でいて白い肌に薄っすらと浮かぶ二本の隆起、どちらも均整の取れたいつそ艶かしい骨の形。

男ならば視界に収めた瞬間、生唾の飲み込む音すら出してしまうてもしよがあるまい。

「一世一代の大勝負にて手抜かりは有り得ません。そもそも、その首飾りを着けたいと仰ったのが原因では御座いませんか、ならば御諦め下さい」

「でも、だな、折角あの人くれたんだぞ？何日も掛けて態々遠い所まで行って、私の為に鉱石から削って形にしてくれて、それでも

って勇者ポルドーの守護宝石にしてくれたんだぞ。ずっと身に付けて置きたいじゃないか……」

立ったままで、もじもじと首からぶら下げられた眩しい鎖骨に挟まれる、羨まけしからん銀細工を弄る。

十字を型どつた意匠の中央には、まるで少女の二つの紅玉に詠えたかのように、紅い石が部屋の光を反射する。

「……そろそろ頃合ですので、会場の方に参りましょう」

「うつうつ……、こう言うのは苦手だが、折角お父様が用意して下さったのだから無碍には出来ないし、けれどアイリーン、やっぱり途中から入るのは止めにしないか？ 気付かれずに終わる可能性が高い、形式に乗っ取るなら会の始まりから居るべきではないのか？」

「演出と言うモノです。それに、相手の虚を付く事で効果的な行動がより一層強くされます。不意打ちと言うのは言葉が汚いかもしれませんが、戦場では実に有効で御座います。そろそろ覚悟を御決めください。王も今回の演出には面白いと御許可を下さいました。断言します、姫様の登場にて会場は静まり返り皆がその目を見開いてこの出来栄えと美しさに凝視する事でしょう」

この完璧な仕上げに一体何時間かけたかと思ひになりますか。アイリーンが確信を持って送り出すも、やはり足が重い様で溜息を堪えて奥の手を出す決意をする。

別名、棒でぶら下げた人參。

「こう言った事は出だしが肝心です。胸を張り堂々として下さい、それに首に下げている物を見せるのは抵抗があり、隠さなければならぬ程の恥ずかしいのですか。ならばお外し下さって結構です、代わりにもっと良い首飾りを御選び致しましょう」

「アイリーン？お前はこの手作りの細工を、先生の贈り物を侮辱するの？」

か弱く儂くも見えた少女から、重圧が発せられる。

戦闘経験も無い少女の何処に、鉄火場を修羅場を乗り切ったアイリーンを、押さえつける事が出来ると信じられようか。いやはや盲目。

193

「ならばその意気を持って御歩き下さい、息を呑む会場の人々さぞや面白い顔が見れる事でしょう」

「分かった、分かった！……態々先生を引き合いに出さなくてもいいのに」

「御分かり頂き結構で御座います、無事に今日を越せましたらコリ  
ーより届きました『第二特殊監視対象』の観察記録を“全て”開示  
致しましょう」

瞬間的に少女の耳が跳ねる、即頭部の耳ではなく、頭頂部の両脇から謎の耳が生えているのが見間違えられる所かもしれない。

その少女の顔には「本当か？本当なのか?!」「いや待て、アイリーンお得意の誰も分からない冗談の類かも……」「しかし……ゴクリ」などと密かに葛藤しているつもり少女だが、年上のアイリーンには手に取る様にはこの事であろう。

「こほん、コーリネファンの仕事振りを見るのもいいだろう。きっと勇者ボルドーが危険に身を晒すのもこう言う心境を言うのだろうな。『俺が往かずして誰が往く』とな、守護宝石が頼もしい」

「あの男の作る物です、頼りになる様にも思えません」

「ふふーん？“アイリ”その眼鏡の使い心地はどうだ？」

「……さあ、本当に時間が迫って参りました。これ以上御待たせすれば、こちらに乗り込んでくるやもしれない御仁がおられます“クールエンフュルダ”様」

「ああ、気は進まぬが往こうか。……それと約束を忘れるなよ？」

部屋のドアが閉められれば、ぼんやりと光る灯り一つが家具を照

らし、空に浮かぶ月の様に静かな小宇宙を作り出していた。

時刻は遡り、誕生祭の朝の事。

「朝もはように家を出て、街に繰り出し書生さん、目的なんぞは無いにしろ、旭見つけて身を隠す」

最後に一つ大あくびをするのは、草臥れた三十路過ぎのフミアキ。朝の清々しい一時とは真逆の、徹夜明けの重たい顔にやはりあくびを一つする。クーに見つかったのなら、また心配されるだろう。アイリを帰したその夜から、先程まで執筆を続けていたのだから。

「偶に朝歩くのもいいねえ、夏場だからいいんだろうけど冬場はやばそうだな。」

太陽は未だ顔を出さない時間帯、しかし刻々と闇色から家々はその色彩を浮かび上がらせる。

昨晚まで祭りの準備をしていた住人は眠りの中、商売人がちらほら出店の支度を始めているのが見える。

仕事熱心な商人を横切り、住宅街の広場に出る。

ベンチを見つけて小休止を挟む、なんと言ってもフミアキの借家からここまでは結構な距離がある。

「あー、疲れた。首がぺきぺき鳴るわ、旅でも思ったけど体力落ちてるな。散歩の冗談は本当にした方がいいのかもしれない、折角旅で身体がこなれてる今が始めるチャンスっぽいし」

またあくびを一つ。

「うお、太陽が……うぐう、太陽か、太陽、太陽信仰、まさか世界跨いでも太陽信仰があるとはね。あれだけでかけりや、自然と目がいつちやうのも分からない訳でもないか。古来よりインカ、アステカ、エジプト、日本じゃ天照大神様だし逆に太陽信仰が育たない場所が無いくらいだな。不思議だな、太陽信仰を熱心に拜んでるのは徒人族ばかりで、他の種族は“おおきいもの”を信仰している。語感からすると巨神信仰っぽいけど、本当の所なんなんだろうな“おおきいもの”って、グリゴスさんはあんまり教えてくれなかったからなあ」

大きいあくびを一つ。目を擦り目ヤニを取り除く。

「概要は、三種族に『方陣』って謎の力を与え『暗黒時代』を生き

抜く“力”を三種族に授けた、と、言う事くらい……。『暗黒時代』  
つて何ぞな？書物を探しても、その時代の事柄に関しては極端に少  
ないし、「人口が激減した事」「世界が荒れたと言う事」「三つの  
種族が身を寄せ合っていた事」その三つ以外は、本に依って話がま  
ちまちで信憑性に掛けるし、うーん、共通の価値観がなければ信憑  
性なんて判断し得ない……。か、この世界の常識があればもう少し判  
断基準になるんだろうけど」

「ほうほう、面白い話ではあるのお」

フミアキの横からしゃがれた声が掛かかるも、フミアキが独り言  
に没頭している為に気が付いていない。

「教導院には、おそらく関連書物があるはず。宗教つてのは歴史を  
保管する場所でもあるし、ただ、場合に寄っては自分達に都合の悪  
い物は改竄してしまうなんて言うのも。そもそも、教導院には睨ま  
れてるし、虎子虎穴じゃないけど気軽に見せてくれって言ったら今  
度こそ処刑されそうだな」

「ふむふむ、それは大変じゃのお」

隣の人が相槌を打つ。フミアキの独り言に相槌を打ってる老人が  
一人、奇妙な光景だが周りに居るのは、朝の準備に精を出している  
商人が数名、忙しい為かこちらを見向きもしない。

「うーん、うーん、はて、何を最初に考えてたんだったかな？」

「そうじゃな、体力不足に始まり、太陽信仰で、“おおきなもの”に移り、次いで『暗黒時代』の考察じゃったな」

「ああ、これはご丁寧にありがとうございます。いや、お恥ずかしい、最初から独り言を聞かれましたか」

「何、座って休んでおつたら、お主が来て面白い事を喋り出すのでな、ついつい聞いてしまったよ」

「これは大変ご無礼を致しました。声も掛けずに腰掛けるなんて、大した失礼をしてしまった様で申し訳ありません。私はフミアキと申しますが、ご老人は？」

「これはこれは、ワシはマールレと申す。この通り暇を持て余した早起きの年寄りでの、趣味で『暗黒時代』について調べておる。ワシの周りの若い者達は歴史には興味が無いらしくてな、話の通じる同好の士が現れたと年甲斐もなく嬉しくての」

漸く二人の会話が繋がり、お互いに名前を交換する。

黒いつば帽子にひと目で分かる上等な生地を使ったであろう薄手の服に、その小さな体躯を収めている。つば帽子から覗く髪は白く

染まっているが、ふさふさであることが窺える。

マールレは、その長い人生を刻み込んだかの様なシワをくしゃくしゃにして笑顔を見せていた。

余程、趣味の話聞いてくれる人がいないのだろうかと思わせる。

「いやいや、私なんて浅学の身で、何も分からない事ばかりです。多少齧ったくらいといいますが今も頭を抱えている始末ですよ。むしろ想像の方が多いくらいで」

「思いを馳せると言う行為に意味があるんじゃ、じゃがワシの周りの若い者は歴史を紐解くと言う事を、教科書以上にせんのだよ。型通りの王国史でもって良しとする、時代の奥を、分からない事に興味を示さん。『暗黒時代』と言う謎に包まれた時代を探ると言う知的探究心、想像を働かせ彼の時代を夢想する。そんな事してると、仕舞いにはボケたかと言い出す！全くもって理解しようとしん！確かに今を生きる以上、過去の話よりもこれからの先、未来の話の方が魅力的じゃろうが、過去を積み重ねて今があると言う事をまるでわかつたらん！若い者が未来を向くのは若者の特権だがの、過去の歴史を省みる事で今に貢献すると言う事もあるんじゃよ。嘆かわしいものだよ」

「あのマールレ老？」

「そもそもあの馬鹿息子め、ワシの研究の蔵書を見ては「これいくらで売れるんだ？」などと吐かしよる！何時もは埃臭くてかなわんと言うクセに、稀少な本が少なくないから手荒に扱うなと注意しよ

「つたらコレだ！金の亡者めが、一体何処で教育を間違ってしまったんじゃ……昔はあんなに金に汚い男ではなかったんじゃが」

「なんと言いますか、ご愁傷さまです……」

「ううおっほん！これは見苦しい所をお見せした、お詫びと言っははなんだが、『暗黒時代』について興味があるようじゃったな。ワシが教えられる範囲で良ければ『暗黒時代』の講義をしても良いぞ？」

「どうやら最後の一言が言いたかった様だ、シワシワの顔がまるで少年の様に輝いていたのがいい証拠だろう。」

「だが、もう今日は帰らなくてはならんくての。毎日この時間にはここに居るから、暇があればこの年寄りの講釈を聞きに来てくれ、強要はせんでの」

「不定期な時間の仕事をしてるもので、毎日は来れないかもしれないかもしれませんが、なるべくその講義を拝聴しに伺いますので宜しくお願います」

「無理はせんでいいんじゃよ？なんせ年寄りの話は長いからの」

「私も『暗黒時代』には興味がありますので、是非とも聞きたいのですよ」

「そーかそーか。と、満面の笑みでもって去って行った。

太陽も大分顔を出し辺に人通りが増えてくるので、フミアキも帰途に着く。

本日は第二王女の誕生祭である。

ガシャン！と言うガラスの割る音に目が覚める。

部屋は真つ暗で弱々しい月光が僅かに部屋を照らす。

明け方にマールレと会話し、家に着いては執筆していたフミアキは、何時の間にか寝ていた様で口元のヨダレを拭う。

「……………むう、今のは……………」

起きがけの僅かな頭痛と共に書斎の隣、寝室の方から聞こえた音を探りに鈍い身体を動かす。

油断も躊躇も無視した動作で寝室のドアを開ける。

「家は新聞、勧誘、宗教の類はお断りですよ、あと物盗りの類なら命は勘弁して下さい」

態々声に出して部屋の中に入るも、そこにはフミアキの喋ったモノが一つも当てはまらない死体が俯せの状態で横たわっていた。

「うわー……」

## 12話 新しいで合い（後書き）

ここまでお読み頂き有難う御座います。

12月に入って行き成り40件程だったお気に入りが1500件と言う謎現象に遭遇しました。月替わりで確変でも入ったんでしょうか？

お陰様で沢山の方に見ていただき、過分な感想も頂き恐縮の至です。

思いつきの話でボロがボロだったと深く認識するにあたり数多くの指摘を受け、11話の大幅な修正をする予定です。途中まで書いていた、この12話を書き終えましたので今週中には手直しするつもりです。年末が近づき、恐らく手直し+後1話くらいで今年が終わってしまいそうです。

沢山のご感想有難う御座います。

他にもご意見ご感想ありましたら、どうぞよろしくお願ひします。

12/07活動報告更新しました。

12/18改稿 1/1改稿

### 13話 青年で進展

「死体が俯せの状態で横たわっていた…。っと、ナレーションしてる場合じゃないか」

やれやれと思うもここは仮宿、現在は辺りには窓ガラスが散りばめられ、フミアキのベットをデコレートしている。

放置した日には、後で持ち主になんと言われるか堪ったモノではないだろう。

取り敢えず物体を観察する事にする。

夜更けに、言うなれば『厄介事』と断定出来る状況下である。

静かに自分の仕事を進めていたフミアキにとっては、ごめん被<sup>じ</sup>りたい現実にやる気なぞハナからない。

「仮に物体Xと命名しますか。性別男、身体的特徴から徒人族と推測。身長大凡170前後痩せ型、髪は短くグレイアッシュ。窓から家に侵入、おそらく不可抗力。てい！ふむ、原因は…右腹より斜<sup>はす</sup>に肩までの切り傷。逆袈裟とは渋い太刀筋だな、血は…止まってる。失血で意識レベルの低下、この話にも反応なし。この青年、イケメンか。よし放っておこう」

「う…ッグ…」

物体Xから呻き声が漏れる。

まるでフミアキに抗議する様な良いタイミングだった。

「意識レベルの上昇を確認。ふーむ、これなら何とかかなりそうだな。治療方陣で以て、後は暖かくしておけば良さげか」

方陣って苦手なんだよな。ぼそりと呟く。

床に人差し指を付け、たどたどしくも地陣を起こす。

「ひ、ふ、み、暗闇抜ける東尾根あづまおね、よ、い、む、天地無明に送る西雲、な、や、く、黎明以て円陣の、約束やくそく違えぬ糸踏みよ、離騷りそう断ち往け」

「『オーオンの祝福』アレンジバージョン」

建国王の名を冠した、始まりの治療方陣。

全ての円環陣の出発地点であり、治療方陣の誰もが覚える紋言だが、フミアキは勝手に弄ってる様である。

地陣から起こした円環陣の光を以て、物体Xの傷口が淡く光が走る。

同時に、何故か物体Xの頭部にやたらと光が咲く。

「はて、頭にも傷があったのかね。もしかして、アレンジしたのがミスった…？」

本来だつたら有り得ない事だが、フミアキは正しく方陣を学んでいない。

使えはしないが四方陣しっぽうの方が、グリゴス経由で詳しい位であった。故に光具にのめり込んだと言つてもいいのだが、フミアキの心配を余所に物体Xに光が乱舞する。

「ガガ……うグあ」

「どございよう…」

フミアキにしては珍しく本気の籠った呟きだった。その時フミアキに良案が走る。

「そうだ、今のなーしよ！これでいい、もうちょいしっかり思い出しながらオーオンすればいいのだよ」

「おま…」

「いつその事、主よ人の望みの喜びよ、とかの方がいいのかな。いやいや、ここは日本的に南無阿弥陀仏の方がいいかもしれん…失敗してもそっくりそのまま葬式に出来そうだし」

「まして…」

「ええでは、こほん。なーむーあーみー…あー、よく考えたら知らないんだった。あれ、ぎゃーてーって何だったかな。んー…、ぎゃーてーぎゃーてー、はーらーぎゃーてー、はーらーそーぎゃーてー、ぼーじーそーわか、はんにゃーはーらーみったー、しんぎよー…』  
『オーオンの祝福』般若心経バージョン！」

「やめんかつー…！」

「おお、効いた。やはり般若心経最強説は間違いではなかったのか…」

「てめえ、なんて事してくれやがる！」

起き上がった青年が喚き立てる。

先程までぐったりしていた物体とは思えない程、元気である。

「なんだあの怪しげな治療方陣はよ！危うくこの俺が死ぬ所だったじゃねーか！」

「生きてるじゃないですか。元気になって良かったです。それと、ここは感謝される場面では」

「された方の俺の身にもなれや！元々自前で何とかなっただけなのに、あんな痛い治療方陣は初めて受けたぞ！治療方陣が痛いつてなんなんだよ！ざけんな！」

「それはすいません。何せ治療方陣は苦手なモノで、でも問題なさそうでした」

「てめえ…、いいか後で俺にしっかり謝っておけよ！」

憤懣やる方なしと言った風で文句を言った青年だが、次に奇妙な行動をする。

その場で横になり、先程まで倒れていた格好に戻る。

「……何してるんですか？」

思わず尋ねるたフミアキ、むしろ尋ねずにはいられない行動に困惑の色が濃い。

「何って、俺が起きるのを待って…ちょっと待てえええい！何で俺が動けるんだ！？」

ああそうか、可哀想な人なのか。と、フミアキが一人合点して温

かい気持ちになる。

青年は青年で自分の置かれた状況を必死に分析している様だった。

「まさかアレか、アノ変な方陣のセイなのか…。それっくらいしか考えられんし、頭痛が無くなったと思っただら動かせる様になった…」

「……さて、寝るとするか」

一人考えこんでいる青年を放置する事にした。  
が、むんずと肩を掴まれ青年が真剣な顔で詰め寄る。

「なあ、あんた何者だ？」

「何者も何も、しがたい物書きをしています、フミアキと申します  
が」

「一般人だあ？信じられるかそんなモン」

こちらが名乗ったのに返さないとは何なんだ。と、恨めしい思いが湧くが、もう面倒事が雪達磨式に大きくなって行きそうな予感からか、フミアキがここで話をバツサリ切る。

「別に信じて頂く必要はありませんよ。身体も動くようになった事ですし、どうぞお引き取り下さい」

「はあ？ちよ、ちよつと待てよ！俺はだな…」

「こちらは貴方の個人情報に一切興味ありませんので、今日、ここで見た事は全て忘れますし、その方が貴方にとって利があるんじゃないですか？傷は癒えた、どう言う理由か貴方は追われている。ならばこんな所に留まっている方が損ばかりだと思いますよ」

青年は「追われている」の言葉に強く反応した。

我の強そうな感情が引き潮の様に消え、無機質な、鋭利な顔付きに変わる。

数分の沈黙が場を縛る。

青年がフミアキの方を見つつ侵入してきた窓まで身体を移動させる。

「気に食わないがあんたの言う通りだ。今日はこれで引き下がる。…どんな経緯であろうとあんたは“俺”を“解放”してくれた。礼は言っておく、助かった。じゃあな」

「別に介抱したのは成り行きですよ。私の治療方陣は真面目なモノではないので、ちゃんとした人に観てもらおう事をお薦めします」

「自覚してやがるじゃねーかよ…。ふーん、あんた真っ黒だな。明かりの無い場所だと“髪”も“瞳”も真っ黒過ぎて、肌が浮き上がって気持ち悪いのな」

捨て台詞気味に、フミアキの“外見”を読み上げて飛ぶ動作に移ろうとする青年に、フミアキが狼狽する。

「へ…？私が“分かる”んですか？ああ、ちよつと待つてく」

青年からすれば単に嫌味が効いたと思い、フミアキからすれば、驚天動地の出来事であった。

過去、正しくフミアキを捉えた者は二人、異世界出身なセイなのかフミアキ自身にも分からなかったが、見る者に依って“外見がずれる”らしい。

らしい、と言うのは、グリゴス家の協力で判明した事だ。初対面の人間に「私が見えますか？」なんておかしな質問をする事も出来なかった為である。

王都に来てからは、初対面の人間には注意深く、会話から探る事を繰り返して、今の結論に落ち着いた所であった。状況が分かった所で打破出来る事もなく、フミアキは所謂一つの「異世界補正」だろうと、変な所に決着を見せた。そもそもこの現象が、直ぐ様『死』に直結する事もないだろうと、呑気に構えている。

それでも行き成り本来の姿を、気付かれる事の無い自分の外見を

言い当てられると、やはり驚きが強い。

青年は破った窓から姿を消し、フミアキはただ見送るだけであった。後に残るはガラスの散乱した自分のベットのみ、色々と溜息に乗せつつガラスを拾うのであった。

「なんで居るんですか」

「おう、邪魔してるぜ」

朝の散歩から戻ってくると、窓を壊した青年が書斎の長椅子に座ってフミアキに手を振っていた。

げんなりした声になったのも、本を片手にくつろいでいる青年の姿は、もはや我が家の感覚であった。

「随分朝早くから動いてんのな。アレか、ソール様でも拝みに行ってきたのか？」

「私にそんな趣味はありませんよ。ただ、適度な運動と人に会いに出かけただけです。まあ、今日は会えませんでしたかね」

「ふーん、”そんな趣味”ねえ。教導院に楯突いてるって噂は本当だったのかよ」

「別に楯突いてる訳じゃないですよ。結果的にそう言う立ち位置になっちゃった…、あのですね、何故貴方がここに居て、しかも勝手に私の本を開いてるんですか」

自身の生活空間に、未だ名前すら名乗らぬ青年が我が物顔で居る事に、不機嫌を隠さずに問いかける。

しかも、相手の目的が分からない。呑気なフミアキとて、好き好んで虎の尾を踏みたい訳ではない。

「堅いこと言うなって、あの後、いろいろと事後処理してて忙しかったんだぜ？俺の元依頼主をぶっ殺して、俺が死んだ様に偽装して、んで報酬ちよろまかしたりしてな」

これは世話になった礼だ。青年が皮の袋を取り出す。

パンパンに膨れた袋は幼児の頭程で、ジャラジャラと音を立ててテーブルの上にその中身を零す。

「……………」

「なっ！すげえだろ！あんたには本当に世話になったからな。こうして自由を満喫出来るのもあんたの御陰だ。これは、その礼だと思つて受け取ってくれよ。遠慮はいらなないぜ、俺くらいの腕ならいくらでも、どうとでもなるつてモンだ」

得意気に話す青年の顔は喜々としていた。フミアキの顔は比例してどんどん曇っていく。

袋の中から零れた物は日の光が反射し、眩く輝く金色の硬貨だった。

俗に金貨と呼ばれ5枚もあれば、4人家族なら1年は何もしなくてもいい程の価値の代物である。

最も、一般庶民はお目にかかる事は滅多にない。

青年はまるで子供の様にハシャイている。青年は自分の出した物に、硬直しているフミアキを見て気を更に良くさせた。それはそうだが、これだけの金額そうそう一般人が目にする事はない、驚いているのである。フミアキを見て、より一層の満面の笑みを浮かべた。

金と言う物の価値を知らぬ人間なんて居ない。金と言う力を知らぬ人間なんて居ない。

青年はその事をよく知っていた、知りたかった訳でもないが。

「それで、あんたに頼みたい事もあるんだ」

「これを持って帰りなさい」

青年の言葉を遮る様にして、短く言い放つ。  
短い言葉の中に、ハッキリと苛立ちが現れていた。  
足を翻し、青年に背を向け書齋を出ようとする。

「ま、待ってくれよ！こんだけの金だぜ？！少ないか？まだもっているのか？」

全く以て予想外と言わんばかりの顔で、必死にフミアキを引き止める。

フミアキはしかめっ面で青年に向き直る。

「そのお金は要りません。お金で礼になると思っているんですか？」

「当たり前だろ？あんたは俺の命以上に、俺を救ってくれたんだ。だからこの金で……」

なんで？と言う顔で、青年の言葉が尻すぼみになっていく。

それは、親を引き止める子供の様で、フミアキに冷静さを戻す切欠となる。

吐き出したい溜息を堪えて、表情を柔らかくにしてフミアキが青年に向き合う。

「まずはお互いに自己紹介からしましょう。話はそれからです、いいですか？私は物書きを生業としています、フミアキを申します。」

「はいどしどし」

「え？あ、俺は、30…番…」

「はい、良く出来ました。そうですね、30番ですか。私の事は呼び捨てで構いませんので、貴方の事をサンと呼んでいいですか？」

「は？」

「ああ、ダメならいいんですけどね」

「いや、ダメじゃ…ない。サンか…、なんか、適当な呼び名だよな」

「あだ名なんてそんなモノじゃないですか？私はいいと思いますよ、サン」

「あんだ、すっげー変わってるって言われないか？」

「たまにそう言われますね。それとサン、あんだ、ではなくフミアキです」

「分かったよ、フミアキ」

そう言つて30番、サンは苦笑<sup>にがわら</sup>う。今まで感じた事のない、胸がぼかぼかする様な気持ち<sup>にがわら</sup>が湧き上り、なんだか笑つてしまふ。何時の間にか「苦」が取れた自然な笑いへと変わる。

「初対面の人間に対しては、まずは自己紹介からです。それだけでほら、こんなに簡単に話が進むんですよ。まして礼を、と思うのなら礼儀を覚えなさい。そして、私への礼と言うのなら、感謝の言葉だけで十分です。見返りが欲しくて助けた訳ではありませんからね。私は私と言うモノに従つてサンを助けたのですから」

無垢な目でフミアキの言葉に聞き入る。

大きく息を吸い、はあ。と吐き出す。

「本当に変な奴だなフミアキは、こんなの初めてだ。気になんないのかよ、30番なんて変な名前をよ。あの夜何してたとか、この金の出どころとか」

「変わつてると思いますよ、私の知っている世界なんて狭いモノですからね。そう言う風習のある土地だつて、この世の中にはあるんでしょう。決めつけるなんて愚考ですよ。それと昨晚の事でしたら言いたい事が山程ありますよ。行き成り窓ガラスを割つて謝罪の言葉も無ければ、名乗りもしない、礼は「助かった」とそれだけ。そこは「有難う御座います」でしょうが、全くあの後ガラスを片付け

たのは私なんですよ？この家を傷付けたら怒られるのは私なんですから、もうアイリさんに見付かったらただじゃすまない…」

「う…、すま…、ごめんなさい」

これが説教と言うモノなのかと、サンは顔を引き攣らせる。

すまないと言い切る前に、フミアキに睨まれたので言葉を変え、気が付いたら長椅子の上で正座している自分に新たな感動を覚えるも、目の前のフミアキはさながら魔王に見えなくもなかった。

「いいですか、何もへりくだれと言ってる訳ではないんです。会話の潤滑油宜しく、相手に対して礼を見せるのは人として対等であると言う事なんです。これが社会を構築して僅か数年の場所なら、礼の概念すらないでしょうが、それでも感謝の気持ちが大きく膨れれば、実った稲穂の様に自然と頭が垂れるでしょう。認め、認められ、お互いに尊重し合う事で、社会は形成されていくのだと思います…あくまで私の考えなんですがね」

実際は社会なんて縦、キレイではありませんがね。と、ずうーんと重くなるフミアキだった。

「そうか…、自然と、ね」

区切り、確かめる様にして呟く。

「俺を助けてくれてありがとう……」

フミアキをじっと見つめて答えた。

だが直ぐに「って、これじゃ最初のと変わんねえか」と頭をかく。

「いいんですよそれで。自分の言葉でちゃんと心を込めたのが伝わりました。…うん、素直ですね、若い人がこれだけ素直に人の話を聞いて実行出来るなんて、なかなか出来る事じゃないですよ」

「そ、そうか？そっか、これでいいのか」

顔を赤くして照れているサンを眩しそうに見ながら、フミアキが話を戻す。

「ですので、私へのお礼のお金は要りません。その言葉で十分ですからね、そうそう、先程言った「頼みたい事」ってなんですか？」

「あ、いや、その…、まずは俺の話でも聞いてくれないか？頼み事の前に言っておかないといけないと思って」

「頼み事」が余程大事な事らしく、フミアキをじっと見てサンは

真剣な顔付きになった。

フミアキは厄介事だろうと、もう断る事は考えてはいなかったの  
で、朝飯をどのタイミングで取るつか、そんな事を頭の隅で思いな  
がらサンの言葉を待ったのだった。

### 13話 青年で進展（後書き）

読んで頂き有難う御座います。

キャラを上手く動かせない…。

何か決定的に欠けてる気がするんですよ、数をこなせば多少良くなるのか…。

31日まで仕事で更新は今年最後となります。こんな作品にお付き合いくださり誠に有難う御座いました。皆様の新年が良い年でありますように。

14話 男で女(前書き)

明けましておめでとう御座ます。

14話 男で女

「俺は子供の頃、孤児院に居ただけど、誘拐されて暗殺者として育てられたんだ。よくわかんなえ薬と方陣で、気が付いたら俺は二つになっちまって、フミアキのアノ方陣でようやく俺は俺に戻れたんだ」

「……」

「……」

「それで頼みたい事なんだけだよ」

「え？」

「どした？」

「いやいやいやいや、今のサンの生い立ちの話ですよ？！」

「そうだけ？？」

「前振りからして長い回想シーン突入で2・3話引つ張る展開じゃないんですか?!自分の事なのに短過ぎるでしょう!」

僅か二つの文章で纏めたサンの過去話にフミアキが突っ込む。突っ込まずにはいらなかった。

しかも内容は結構へビーな話にも関わらず、食事中の片手間話の感覚で終えてしまった。

「つつても、俺が二つになってから時間の流れとかあやふやで、なんか長い様な一瞬の様な…。起きたらうる覚えの夢だった、みたいな感じなんだよな」

「にしてもですよ…。人に歴史あり。と名言がありますが、人間一人の人生の軌跡を文字に起こせば、それは膨大な量になります。両親の事、子供の頃の話、自身を形作るエピソードや心の移り変わりの描写、不安定な思春期の思い込みに端を発した黒歴史、高校受験に大学受験、忌まわしき就活と地獄のブラック会社…、ひと月に一回休めるかどうかの勤務体制!月の平均労働時間は16時間、もちろん通勤時間の往復1時間半は除いての計算ですが、夜中でも何かあれば叩き起され、仕舞いには上司の失敗を押し付けられて、左遷させられたと思ったら異世界ですよ?!何ですか?勤務先は異世界ですか?冗談も程々にして頂きたい!何故もつと若い頃にしてくれなかった!冒険活劇がしたかった!ボーイミーツガール!」

途中から個人感情だもれの話にフミアキは自然とヒートアップしていくが、サンは目をまんまるにして呆然と見ているだけしか出

来なかった。

「……こほん」

「持ち直したか…？さすが先生業だな、話してる事全然わかんなかったぜ。こんな小難しい本とか読めるって頭いいんだな」

手にした本を少し上げる。

「王国史 - 建国王の偉業 - 」と題字が見て取れる。

「その本ですか。あんまり宛になりませんよ、ソレ。オーオン王の自慢話にしか思えませんね。肝心要の『暗黒時代』の描写が全く無くて、国が安定し始めた後年の記述しかないんですから。それ以前の前述が「幼き頃から王者の風格を持ち、その才覚はソール神に到達する程（俺スゲー略）」とか「類い稀な仁愛を人族だけではなく分け隔てなく施し、他種族より尊敬と感謝の念が余りに多くソール神も褒め称える程（俺カッケー略）」はては「我が力があってこそ、円陣が生まれる可能性があった（キリッ略）」読んでいて突っ込み疲れる内容ですからね。引き合いにソールを出してますが、お互いに賞賛し合ってるって印象ですよ。ああ、私にも突っ込みしてくれないと話が長引いてしまうので、適当な所で止めていいですよ？あ、ついでに先生業とか何ですか？ファジーな言葉ですね」

「無茶言っつなよ…、あとふぁじーとか良くわかんねえ。ほら、何か本読んでるって偉い人って感じがするだろ？」

「それはまた…随分とイメージ先行ですね。本に対する価値観を釣り上げる事で、一部の上流階級の一種ステータスにまで育ったのか、作り上げたのか、一般に対する習字率が低い訳ですね。くだらないブランド化の為に、本と言うカテゴリーが全然育ってないのはこの為なんでしょうか。文字と言うモノは大衆の身近にあるべき媒体だと私は思うんですが…、こほん」

「あー…、うー…」

サンの頭から煙が幻視出来た。

彼の過去を聞くに、激悪な環境と薬や方陣の影響で、精神を置いてきぼりにして肉体のみが成長してしまったのだろう。

サンの精神年齢は身体と釣り合っていない。言うなれば、サンを育てていた連中は彼を一個人ではなく、便利な道具として扱っていたのだろう。

妄想暴走しがちなフミアキを突っ込み制御する技術はサンにはないのであった。

最も、片や異世界人と、片や教育が物騒な方向オンリーで改造された人間とでは、噛み合わないのはしょうのない事だろう。

「大丈夫ですか、サン？」

「んー…、そんなアタマのいいフミアキにおネガイがあるんだー…」

若干後を引き摺りながら、サンがここに来て漸く本題を出す。心の何処かで、強引にでも話を進めないと、にっちもさっちもいなくなると察したのかもしれない。それは。

「オレに、オンナのコとナカヨくなるハウハウオシえてくれ」

「え？」

「フミアキ……」

サンの気遣う視線が痛かった。

「頼み事」を引きるける羽目になったフミアキはサンの熱い要望で、その日の内に街に繰り出した。

目的は勿論ガールハントである。が、結果は散々なモノであった。彼女居ない歴々実年齢の、しかも、社交性の低い三十路過ぎの男にとつて、仕事意外で異性に声を掛けるなぞ至難の技だった。以下遣り取りの一例である。

「お嬢さん、宜しければお茶でも如何ですか？」

「え？わ、私、そんなに軽くありません！」

外食産業が未だに育ってない王都で、お茶を飲むと言う行為は、自宅に限られてしまう。外食は屋台や出店が一般的で、他は酒場と健全なレストランなど茶屋の類はまだない。

つまりは相手の家もしくは、自分の家に誘う行為であり、okすると言う事は“ソウイウ事”になる。

そもそも誘い文句が元の世界では古い上に、こちらでは初対面の相手に対して言うには失礼極まりない。

「お嬢さん、私と一緒にソール神殿に礼拝に行きませんか？」

「ソール神様を口実にするなんて、サイテー！近寄らないで！」

徒人族にとってソール神は神聖なモノである。信仰を生活の糧に生きる人が多く、熱心な信者の多い王都の、しかもソール信仰の膝下で軽い行為の引き合いに使えば、女性の反応は極々自然なモノと言えよう。通報されなかつただけマシかもしれない。

「ソール神万能説は嘘だったのか…」普段ロクな信仰も無いクセに、都合のいい時だけ利用するファミアキは『特殊監視対象』として、恥ずかしくない姿だった。

「へーい、かーのじょー！君可愛いね、その褐色の肌がまるで夜明け前の薄暗い大地には、安らぎの夜を内包している神秘的な癒し効果を感じ狼の遠吠え。金色の瞳がさながら夜明けに昇る朝日の様に映えてモーニングアワー。御陰でその目に見つめられる度に電気うなぎに巻き付かれた様にビリビリする君の瞳にカンパーイ！」

「…………ふんっ！」

「ぐふう…、ハートブレイク、ショット…とは…」

足を肩幅に開き右脇に添えられた拳は、足から膝、腰から腕に全身のバネを使い、更には手首に捻りを加えた打撃に依って、フミアキの心臓に放たれた。

「ええ、世界を狙える逸材でしたよ」とは、フミアキの後日談。

この頃にはサンは涙目になっていた。フミアキにトンデモない頼み事をしてしまったと思つて。

「もういい、フミアキ。頑張った、頑張ったからもう休もう…」

「いいえ、まだ、まだです…！サン、君はずっと他人に操られて青春を不意にしてきたのでしょうか？誰も通る思春期の通過儀礼すらも

犠牲にされた。そんな君が、女性を知りたいと思う事は普通の事なんですよ。何、年長者としてこ、これくらい、屁でもありませんって、ぐふう…、今頃になって膝に气やがる」

ぶるぶるした中腰の格好で生まれたての仔鹿をしているフミアキを、サンが必死に支える。

もう陽は傾き、夕の暮れ合い。街の広場には帰宅を急ぐ人々と、昼の街から夜の街へと徐々にその顔を入れ変えていく。

夜の女性の方が交渉は楽だろうが、サンの情操教育に悪いと考えたフミアキが一般の女性にこだわった。

「どづしたんじゃ、こんな所で何してるお主ら？」

声を掛けられたフミアキが視線を石畳から起こすと、黒いつば帽子を被ったマールレがフミアキ達を怪訝ウザな目で見ていた。

「これはマールレ老、こんばんわ。こんな所で奇遇ですね」

「誰だ、フミアキ？」

「今晚わ、そちらさんは新しい顔じゃの、ワシはマールレと申す。フミアキ殿の同好の士じゃよ」

「爺さんフミアキの知り合いか、同好ってなんだ？」

「サン？言ったでしょう、礼儀を覚えなさいとまずは挨拶なさい」

「う……すまない。えーと、30……サンだ。……フミアキの……」

「一々こちらをチラ見しながら確認しない事。話している時は相手を見なさい、すいませんマイルレ老こちら私が世話しているサンと言います。図体ばかり大きくて中身がまだまだ子供でして、不躰で申し訳ありません、根は素直ないい子なんですよ」

「ほっほっほ、若い者は大抵皆一緒じゃよ。ちゃんと気を付けようとしている所、うちの馬鹿息子にも見習わせてやりたいくらいじゃな。フミアキ殿とは趣味が一緒に、互いに『暗黒時代』の話で盛り上がったの。お主は歴史なぞに興味はおるか？」

「……難しいの苦手だ、本とか中身よくわかんね」

「サン、もうちょっと勉強しましょうか」

「年寄りの趣味じゃからの、無理に付き合わんでいい。素直なのが良いのじゃよ。大人になれば媚びる事も覚える、覚えねばならん場面も出てくるでな。そう言う者と話しているのは面白くないんじゃ、

今朝なぞ馬鹿息子と大きくやらかしての。金、金、金…あの手この手で無心に来おる。気が滅入ってしまったの」

小柄ながら年齢を感じさせないピンと伸びた背骨から、大きく溜息を吐く。

朝会えなかったのは「例の息子」の問題だったのかと思うも、余所の家庭事情でありフミアキはそっとして置く事にした。誰にも触れられたくない所はあるだろう。

「爺さんいい奴なのに、子供がそんなじゃ大変だな。って子供いるなら結婚してるって事だろ!？」

「サン貴方は」

「良いんじゃないよ、ワシのカミさんはもう亡くなっておるがの」

「申し訳ありません、失礼な話を聞いてしまつて…」

「気にしとらんよ、それよりもサン君じゃったか…青くなつてきてるぞ」

サンの口を塞いでいたフミアキがパツと手を放す。

プライベートに踏み込みすぎたサンを止めるつもりだったが、も

う少して呼吸すら止めてしまう所だった。

「はあはあ…ひでえなフミアキ」

抗議混じりに息を整える。

「初対面の人の事情に踏み込み過ぎでしょう。マールレ老が許してくれたからいいものを、一体何を聞こうと言っんですか？」

「ほら、結婚してるなら女の人の扱い知ってるんじゃないかって思っただ」

「ほおほお、確かにカミさんとは大恋愛をして、いや本当にすったもんだの大騒動を起こしたもんじゃ。懐かしいの、なんじゃサン君は女の扱い方を覚えたいのか？」

「そうなんだよ！俺、あんまり女の人と話した事なくて、フミアキにお願いしたんだけど…」

「んんっ、お恥ずかしい、私も女性の扱いは不得意でしてね。サンは訳あって身体の成長に心が伴っていないのです。女性と言うモノを知りたいと頼まれたのにも関わらず、失敗失敗の体たらくです」

「ふむ、フミアキ殿、サン君の知りたい女性とは“夜”の方ではないんじゃない？」

「ええ、ただ純粹に女性とお近づきになりたい、くらいの考えだと思いますよ。ですので、そっちの方面ですと情操教育上悪いかと思いついて、街中で今まで頑張ってみましたが」

「“夜”の方って何だよ？」

「貴方は知らなくていい事ですよ、まだ」

抗議してくるサンを抑える。

マールレが一考してじゃれ合っている二人に向き合う。

「フミアキ殿や、王都では親の紹介で付き合うのが殆どでの、街中で女性を捕まえるのは難しいんじゃないよ。ワシやカミさんの様な話は少なくてな、それでも何かしらの切欠が無いと“星雲の加護”頼りになってしまうの」

星雲の加護とは、星々の神であるピアラの事である。

星は昼と夜、夜と朝の間に存在し、その関係を取り持つ神として、男女間の縁結び的な神様としても有名である。

「星雲の、と言うと、ピアラ神の事ですか？確か、男女間を取り持つと記憶してますが」

「そうじゃ、よお知つとるの。太陽神ソールと月光神ユールの夫婦喧嘩を和解に導いたとされる逸話の神じゃな。だがの、本来なら昼と夜と朝を繋げ、この世に明日を齎した神なんじゃ。それが、ソール神の威光が高まるにつれて、徐々に格が下がっていったの。今では、男女の中を取り持つ神などと言われる様になってしもうた」

「それは災難を被つた神ですね。その話ならば世界規模の力を持つ神が、今では痴話言ちこちこの神とは。社会継続に関して、子作りを低く見る訳ではありませんが、正しき事は正しく後世に伝えたいモノですね」

「うむ…、あまり大きい声では言えんが、昨今の畢竟しんけい、ソール神至上主義の勢いが強くてな。これでは」

「いけませんマールレ老、それ以上は…。例え話としても、厄介な事になりかねません」

フミアキがマールレの言葉を遮る。

恐ろしさを今以て味わっている身としては、マールレまで教導院とのいざこざに巻き込みかねない。

ましてや、フミアキは監視対象であり、現在進行形で教導院の“

耳”がついてる。その為、フミアキと知り合いであるだけならまだしも、余計な言質を取られたら堪らない。

「すまんの、気を遣わしてしまったか。ワシの様に後先短いとどうしても口が軽くなってしまう」

「いえ、私が原因なんですよ。教導院に目を付けられてしまって…、マールレ老にご迷惑をお掛けするつもりはありませんが、私はマールレ老と会わない方がいいのかもしれないかもしれません」

「ほほう、人の噂とやらは偶に当たる様じゃな」

「知ってらしたんですか。別に隠すつもりではなかったのですが」

「何、ワシの研究も教導院に目をつけられておっつての。お互い様じゃよ、ほっほっほ」

フミアキが目を開く。そこまで教導院の検閲は厳しくなっていたのかと、思わずにはいられなかった。

マールレ曰く、個人でやる分にはお目溢しらしいが、発表は許されていい。との事。

そんな境遇まで似通った同好の士だったのかと、改めてマールレを見つめる。

「最初に会った後に教導院から通達を受けて知ったんじゃが、今まで隠していたのはこちらと同じじゃよ」

「いやはや、人の出会いと言うモノは不思議なモノですね」

「全くじゃの、それは男女の間にも通用するかもしれんな」

「成程、そうですね。ああ、サンの話でしたね。私の知ってる女性はきつい人ばかりですから、紹介するには向かないんですよ…。なんとも情けない話です」

「ワシも若い者との交流が持てなくてのお、息子も未だに独り者な事でそっちの心配もせんといかん…」

お互いに溜息を出し合う。

そう言えばと、フミアキが思い出す。

やけに静かだと思い周りを見渡すも、サンが居ない。

「立ち話が過ぎてしまったか、悪い事をしたの」

「夢中になってしまいましたね。全くあの子は何処に行ったのか…  
すいません、探してきます」

踵を翻し辺りを探してみる事にした。

丁度その時、フミアキの頭上からガタイのいい男が降ってきた。

突然の事に避けきれず押しつぶされる。

マールレは呆気にとられて固まっていた。

「フミアキー！そっちに行ったから気を付けるー！ー！」

サンの声が遅れて届くも、時既に遅し。

名も知らぬ男の下敷きになり「そう言う事は早く言って欲しい」と口には出せずに、フミアキの意識はシャットダウンされた。

## 14話 男で女（後書き）

ここまでお読み下さって有難う御座います。

異世界でナンパなんて自分でも何書いてるんだと思います。  
次で女性をちゃんと出す予定ですが、魅力的に書けるかどうか…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9638x/>

---

異世界で物書き

2012年1月2日03時00分発行